

---

# Fate/ stay with murder

舞月朝影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate / stay with murder

### 【ZPDF】

Z6508Y

### 【作者名】

舞月朝影

### 【あらすじ】

三年間。虚月識は『』と向き合っていた。それは無と言えて無と言えず、有と言えて有と言えないもの。形容するならばアカシックレコード。直訳するならば死。三年の眠りから目覚めた虚月を待っていたのは、聖杯戦争という魔術師同士の闘いだつた。

「僕が、今度こそ聖杯を破壊するよ 切嗣さん」

作者「原作風に設定を小出ししていくので、原作を知っている人からしたら煩わしいかも知れません。どうかご了承下さい。」



「はじめ、ビビだ。

僕の声が世界に反響する。けれど、周囲には何もなく、存在するものは無かった。

虚無に支配された空間。

無。

誰もいない、何も無い世界に、ただ一人、僕はぽつんと浮かんでいた。いつたいつから僕はここにいるのだろう。なぜこんなところに来たのだろう。それよりも、いつたいつやつて？

何も無い世界。そこに存在するのは、よくわからない何か。暗くて、深くて、冷たくて。それは嫌悪感を抱かせるものでありながら、どこか親しみ持てるものでもあった。

これが、死なのか？

わからない。解らない。判らない。僕には何も判別がつかず、ただ頭の中に流れこんでくる概念だけが僕の意識をつなぎとめていた。

これは、なんだ。

死。人々が世界にとどまれる時間を過ぎたとき、始まる、崩壊の始まり。

崩壊の終わりは　この、虚無に辿り着いた時だけだ。

＋＋

「……ここは、どこだ？」

目が覚めた。見上げた天井は真っ白だった。手を動かそうとする  
とズキズキと痛み、体中、痛みでまったく動かせなかつた。幸いに  
も痛みのない眼球だけを動かして周囲を見る。

僕の隣には、看護師さんがいた。彼女は横でじっと本を読んでいた。

あの、と声をだそつとしたが喉がうまく動かない。最後に声を発  
したのはいつのことだったか。僕には昨日のことのように思えたが、  
あの虚無にいた時間が解らない以上、記憶が確かに確  
かはどうか確  
信はなかつた。

数十秒間、じつと見ていると目が合つた。どんぐりのよつに丸い  
目を見開いて、大いに驚き、詠嘆した。

「先生、先生！　虚月へへづきくくくんが目を覚ました！」

彼女は本を床に放り投げて、丁度部屋に入ってきた先生に駆け寄  
つた。先生は彼女より驚き、看護師さんと共に僕に歩み寄り、痛い  
ところはないか、どこか悪いところはないかと聞いてきた。

「体を動かすと、全身が痛いです」と正直に言つ。医者に嘘を言つ  
ても始まらない。

「そりゃ、君は運動していなかつたからねえ。筋肉が剥離しかかつてゐるのだう。……しかし、他に悪いところはないのかい？」

医者は自分の言葉を一囁切れさせ、僕の全身をまじまじと見る。それから、「もしないとしたらこれは奇跡だ。三年間も眠つていて少年が目覚めて何もなかつただなんて前例がない！」

医者は大喜びだつた。そんな嬉々とした表情を曇らせたくはなかつたが、僕はどうしても聞きたくなつて尋ねざるを得なかつた。

「あの、……先生」

「どうしたね？ 虚月くん」

「どうして、落書きがされているんですか？」

「…………落書き？」

先生は、途端に顔を顰めた。きょろきょろと周囲を見回して、「そんなものどうにもないじゃないか」と訝しげに答えた。けれど僕にはそれが信じられなくて、言わざるを得なかつた。

「だつて、ほう。先生にも、看護師さんにも、壁にも、ベッドにも……線や点がたくさん書かれているじゃないですか」

見ていて、氣味が悪い。こんなものをずっと見ていられない。見ていたら、僕はあの虚無の世界を思い出してしまつ。今思うと、あれは濃厚な死の塊だつたのだろうか。それとも、なんなのだろうか。感覚的には理解できたが、言葉に表すことができない。

それと同じだった。その「落書き」は一つ一つが脈動し、生命の躍動をありありと見せつけていた。特にその線の広がる中心である点は、命という概念を感じさせるほどだった。

医者は僕のそんな言葉を聞くと、「疲れているのだろう。今日はゆっくり休んで、明日また会おう。その時に詳しいことを聞いてあげるから」

そう言いながら、医者はゆっくりと僕から離れていった。手招きで看護師を呼び、歩きながら話をしているのが聞こえた。

「これは前例がある。確か×県の病院だったのだが、ある患者がそうだ、彼と同じくらいの年で、同じような症状を発したんだ。その子は退院後はちゃんとやって行けているそうだが、田覚めた当初は自分で自分の田を潰そうとしていた。

明日、その子の対処にあたった先生に来てもうひとつことよつ。幸い、私は彼女の知り合いだからね」

「……その先生の名前は、なんといつのですか？」

「蒼崎橙子といつ名前だよ。患者の方は、黒桐式。田名は、西儀式だ」

## Prologue (後書き)

さて、最初の説明パートは飛ばしていくよー！

僕が次に目覚めたときは、橙子さんが病室に入ってきた時の小さな足音が響いた時だった。いつたい何年あっていいのだろうか、と思いながら上体を起こす。

今日は痛まない。なかなか回復しているじゃないか。

「おはようございます、橙子さん」

「おはよう、じゃない。……なんだ、起きられたのか。心配して損したじゃないか」

僕が起きたことに驚きながら、彼女はため息混じりに呟つ。

「の人が僕を心配していた? ……馬鹿な。

そう思いながら、橙子さんの表情が真剣そのものだったことに気づき、本当に心配してくれていたことが嬉しかった。最後にあったのが……僕の感覚では二年前だが、実際には五年も経っている。彼女にとつてそれは長い時間だったのだろうか、と思いながら、足音まで覚えた彼女を見た。

とても綺麗な人だ。赤い長髪はポーティルにされている。いつも眼鏡をかけているのだが、今日はかけていなかった。いつもどおり、アイロンをかけたようにパリッとしているシャツにジーンズとこう格好で現れた橙子さんは、医者というよりもビジネスウーマ

ンに思えた。その美貌は、昔のままだった。

その全身に、落書きされたかのような線を引かれて。

開け放たれていた病室の窓から冷たい風が入り込む。ひゅう、と音を立ててそれは僕と橙子さんの間を通り抜けた。寒いな、といいながら橙子さんは窓を閉じる。その動作をしながら、彼女は僕に「お前のその”眼”さえなんとかなつたら、お前は今日中に退院できるそうだ」と言つた。

「へえ、随分早いんですね。式さんは一週間位必要だつたらしいですけど」

僕が口にした式という人物は、僕の従姉へいとこくだ。いつも着物をきている、どこか割れ物じみた壊れやすさを感じさせる女性だ。昔は両儀という名前だつたが、今では結婚して黒桐という苗字に変わっている。といつても、僕が知っているのは両儀式ではなく、黒桐式だけだが。

僕の識しる両儀式という女性は、僕の従兄にあたる黒桐幹也さんから聞かされている想い出話の中の人物だ。僕が魔術などを知つているということを知つてからは、聞かされることのなかつた彼女の戦いなども少しは耳にすることができた。

最終的に、全て惚氣話に変わつてしまつたが。

「おまえは何故か知らんが筋肉が全く衰えてなかつたし、寝てる間に剥離しかかつていた筋肉がもうくつつきやがつたからな。医者からすれば奇跡といったところだが、まあお前の知る式の件もあるしな　私は驚かないがな」

ふふん、と彼女は鼻を鳴らす。けれどそれを言つたあとで、僕は苦笑した。

「じゃ、なんでその式さんと幹也さんを連れてきているんですか？」

僕はちらと病室の入口を見る。そこから、赤い着物の袖が覗いていた。それと、黒い外套の端が。

バレしてたか、といつて黒い外套の主 黒桐幹也さんが僕の前に姿を現す。以前あつた時とあまり変わらない感じで、上下が黒一色の服装で統一されていた。おそらく彼は黒っぽい服しか纏わないのだろう。

「ほら、式。せっかく従弟へいとこへにあつたんだから顔くらい見せたらいいじゃないか」

「……まあ、そうだな」

そう言つて、式さんは幹也さんに手を引かれて病室に足を踏み入れた。老いを感じさせない瑞々しい純白の肌と、それと対照的な真っ黒な髪。瞳は墨を流し込んだような、美しい黒をしていた。

珍しく、赤いジャケットを着ていない。見れば今日は裏地のある、ちゃんとした着物だった。着替えだけで何分使つたのだろう。

旧知の人物と立て続けに再開すると、感動も若干薄いものとなる。だが彼らが僕のために遠路はるばる着てくれたのだと思うと自然と表情がほころんだ。けれど式さんは僕に再会の挨拶の一つもよこさずに、その黒い瞳で僕を見据えている。

「なあ、シキ。　おまえ、何が視えている?」

唐突に、彼女は言った。その言葉に掛けられた圧を感じ、僕は医者に言つたように線と点が見えるということを話した。すると、それだけで橙子さんと幹也さんの表情が曇る。……なにか良くないのだろうか。それとも、別の原因なのだろうか。

思えば、なんの理由もなく橙子さんがこの二人を連れてきたことはない。つまり、橙子さんは僕のこの“眼”がなんなのか、検討がついているのだろう。

そしておさらく、解決策も。

「……シキ。お前が見ているのは　」

「死」と式さんの言葉を遮つて僕は答えた。「あの、真っ暗な中で僕はずつとあれと向かい合つてきたからね。ああ、あの気持ちは多分一生忘れられないよ。僕は　あそこには戻りたくないと思いつながら、あそこに戻りたいと願つてはいるんだから」

僕のこの言葉を聞くと、橙子さんと幹也さんはもつと暗い顔をした。それと対照的に、式さんは無表情のままだ。

そして、間を開けて彼女は言った。

「お前の見たものは、私の見たものと同じだ」

式さんは、僕にすべてを話した。

そして、僕はこの目がなんなのか知った。

直死の魔眼。物事の終わりを見る事のできる魔眼の一つ。それ  
の保有者は、この世界を見渡しても僕含め三人しかいないらしい。

ひとりは、僕。

ひとりは、両儀式。

ひとりは、遠野志貴。

最後のひとりは失踪して今では所在不明になっているらしいが、  
最後の目撃情報は倫敦でかの真祖の姫と共にいた らしい。聖堂  
教会の情報だそうだ。

僕には魔術が使えないが、有名な退魔の家系に生まれたため、色々  
な所に名前は知れ渡っている。僕の家系はそちら側にはかなり名  
の知れた家である。両儀の家とはかなり昔から親戚づきあいをして  
いるんだとか。

そして、その一人息子の跡取り。七夜に並ぶ退魔の家系なのだから、  
注目されて当然であった。魔術協会、聖堂教会、アトラス院：  
有名所はもとより、小規模な魔術結社などにも「虚月」の名前は  
知られていた。それで僕は蒼崎橙子さんと出会ったのだが これ

は余談でしかない。

とにかく、式さんは眼を制御することに成功。ただそれまでは「魔眼殺し」の眼鏡を掛けていたそうだ。それも一時的で、すぐにやめたそうだが。

僕の魔眼の症状は遠野の息子よりも式さんのほうに似ているらしい。また、橙子さんの話によると「根源のどこかとラインが繋がってしまった」ということらしいが、それも含めて僕の身体的特徴は式さんに似ているのだ。血も繋がっているし、それを含めて式さんに教えを乞おうと思つた。

「式さん、この眼の制御法、教えてくれますか？」

話を終えてあまり間を開けずに言葉を発した僕に対し、式さんは驚きを禁じ得無かつたようだ。いつもは絶対に見せない困惑の表情を僕に向けながら、「おまえ、怖くないのか」と聞いてきた。

「怖くないと言つたら嘘ですけど、それよりも田先の問題を解決する方が先です。いい加減、この線だらけの世界にも飽き飽きしてきましたから」

「飽きた……か」

彼女はそう言つと、どこか優げに笑つた。その瞳は、慈愛に満ちたものにみえた。

まるで、同類を見るかのような

制御法の殆どを教えてもらつたが、ほとんどが感覚的なことだったので、僕は自力で制御することに決めた。

「それじゃあ私は、お前がもう退院しても大丈夫だといつことを言つてくる。それまで黒桐が持つていてる眼鏡をつけておけ。それが魔眼殺しだ。なんならやるだ」

「いつに全て言つてから、橙子さんは部屋をでた。シーツの下から足を伸ばし、ベッドから以前と変わつた様子もない足を抜く。その足で、恐る恐る地面を踏む。

痛みはない。僕はすでに動ける状況にあるようだ。そんな僕を見て、「オレの時は一週間も動けなかつたのに」と呟いたため、僕は苦笑を漏らさざるを得なかつた。ひんやりとした床の上を裸足のまま歩き、幹也さんから眼鏡をもらひ、それを掛ける。

「途端、線は消えた。　ああ、これで少しの間は安心だ。そう思いながら僕はふとした疑問を彼らに言つ。

「えつと、式さんと幹也さんはどこに泊まるんですか？」

「ああ、オレたちはホテルをとつてある。……ま、橙子は自分でどうにかするだろ？」

「つてつて、ま、橙子さんは泊まる場所がないんですね。今のところ」

それさえ解ればいいのだ。と思いながら僕はベッドに腰掛けた。僕の質問の真意が解らないようで、彼らは一人して首をかしげてい

た。

式さんから制御の方法を教わり終えた頃に、医者が来て言つには退院して良いそうだ。僕が当時着ていた藍染めの浴衣を受け取り、式さんと橙子さんに病室を出てもうひとつから着替えを済ませる。すでにひとつで着替が済ませられるほどに回復していく、案外これら先苦労はしないかもしだい、と思つた。

式さんと幹也さんは病院に近いホテルだそだから、退院してからすぐ別れた。それから、橙子さんに宿を尋ねた。

「え？ ……泊めてくれないのか

まるで当たり前のことを要求するかのよつて橙子さんはいつた。もとよりいちらもそのつもりだったので一つ返事で承知した。恩は恩で返すのが礼儀というものだろ。僕は橙子さんの車に乗せてもらつて、三年ぶりに自分の家に向かうことになつた。

三年ぶりとつても感覚的には一田ぶりである。変化していないことを望んでいたとき、ふと橙子さんが思い出したかのように僕に笑いかけた。「それにしても、君も隣に置けないな

「え？」

こつたいななのじと話をしているのだらうか、と思ふ僕は間抜けた返事をする。

「見舞い客だよ。じつは毎日来てるようだよ。名前は なん

て言つたかな、遠坂、だつたつけ

橙子さんはハンドルを切りながら答えた。このルートだと深山町へと進行している。だんだんと見慣れた街並みになつてきた。遠坂、という名前を聞いて十字路を右に曲がつた先にある真っ赤な屋敷を思い出しながら僕は驚愕した。

「遠坂、つて遠坂凜ですか？」

「そう、その娘だ。毎日毎日、自分の時間を惜しんでこていりみのうじやないか。なんだ、恋人か？」

「いえ、そんなわけじやあないはずなんです、けど……」

遠坂さんには以前お世話をしたことがある。言峰教会の神父からの頼みで、僕が稽古をつけてあげたのだ。あの少女は今どうしていのうじやが、と思いながら僕は動く景色を眺めていた。

しばらくして、十字路に出た。ここから坂を登ると西洋屋敷が立ち並ぶ町並みへとなり、左へ曲がると和風の家が立ち並ぶ町並みになる。そういうえば、僕の隣に住んでいた士郎君は今頃どうしているだろうか。そうすると、今まで僕に会つてきた人物の顔が次々と思い出され、今頃どうしているのうじやが、なんともいえない気持ちになつた。

「……そりいえば、識。お前、一人で暮らせるのか？」

「ああ……そりいえば、両親はもういませんでしたね。まあ、経験はありませんけど……いざとなつたらお隣さんに助けを求めるますよ

笑いながらそういう。士郎君は料理がとても得意で、彼の父衛宮切嗣をいつも満足させていた。切嗣さんはが死んだのと同じ時期に僕の両親も死んだのだったと思い出した。ということは、彼が居候を連れてきていない限りあの家で今でも一人暮らしを続けるのだろう。

僕と違つて人徳のある子だから大丈夫だと思うが。

「まあ、無理はするなよ。なんなら一週間位お前のところにいてやうか。寂しいだろ？」

「大変嬉しいですけれどお断りします。僕はこいつ見えてけだものですよ」

からかうように僕は言ったが、橙子さんは「それを承知のうえだ」ときつぱりと言つた。驚いたが、明日には帰つてもらうことにした。

++

血牛にたどり着いたあとのことは特に何もなかつた。あつたしたら、橙子さんが今晩中に帰ると言い出したくらいだ。だから僕は眼鏡を貰つていいかということを聞き、それについて承知されてからもろもろの件に関してお礼を述べた。橙子さんは、「よせよせ」といつて煙を払つように顔の前で手を振つたがまんざらでもなさそうだった。

そののち、橙子さんと別れ、僕は就寝した。

明日からは学校があるのでどうか、と思いながら。

青年のナイフが素早く動く。対立する鬼のような大男の体に無数の切り傷が刻まれる。それに対し男は、拳に煉獄を纏わせて拳を繰り出す。それをすべて避け、目にも留まらぬ動きで辺りを高速移動し、その度に敵の体には傷がつけられる。

まるで、蜘蛛のようだと思った。

大男は、倒れない。ある時は灼熱を生み出し、ある時は青年を焰のまどつた拳で殴り、 その光景は、炎鬼ゝゝえんきゝゝという鬼を思い出させた。

彼らは、殺しあう。

殺し合つて、殺し合つて、殺し合つて

最後に、大男の腕が青年の心臓を穿つ寸前の頸動脈を断ち切つた。

敵は、白い粒子となつて散つていぐ。青年はそれを見ながら、悪鬼のような表情で言つた。

「また消えるのか 紅赤朱、あの夜のようにな、オレの前から姿を消すのか！」

その叫びが響き渡つたときには、青年もあの炎鬼のよつて光の粒子となつて消えていた。

はつ、と田が覚めた。重たい瞼をこすりながら僕は布団から抜け出し、朝食を作ろうかと思い台所に向かつ。清々しい冷気が僕の眠気を吹き飛ばしてくれたおかげで、今日一田は動き回れそうだ、と思つた。小鳥の囀りを聞きながら、僕は台所に立つ。

別れ際に、式さんに渡されたナイフ。これを一体どうしようかと思ひながら台所の前に立つ。

……けれど、料理を作るやる気が起きない。よく考えたら食材がないじゃないか。溜息を付いて、士郎君のご厄介になりますかと腹を決めた。土下座でも何でもしてやるひではないか。

半ば自棄へやけくになりながら、僕は自室へと戻り、制服に着替えた。穂群原高等学校の制服であるベージュ色の学ランとズボンを身にまとつて僕は戸締りをし、お隣さん　衛宮士郎の家へと出かけていつた。

もちろん、式さんからもらつたナイフは忘れなかつた。

徒歩五秒。とりあえず大きな門を叩くが、誰も出る気配がない。

「……よくよく考えたら、こここの屋敷は云々さて誰も出るはずがないじゃないか」

笑つて、僕は黙つて中へと足を踏み入れた。

女性特有の甲高い声が、バイクの音と共に聞こえてきた。振り向くと、そこにはバイクに乗ったボーイッシュな天然教師

「藤村先生、なにしてんですか！？」

「わやつー、ちょ、ちょっと君ー」「先生はちょっと黙つてて！  
ブレー キが解らないんですか、アクセルを踏まないでください右  
折しようとしないでください！」

僕の言葉に鬼気迫る者を感じ取ったのか先生は静かにして、アクセルから足を外してくれた。僕はブレーキを掛け、ゴムの擦れる音を響かせながら止まろうとするバイクから足を伸ばし、スパイクの踵で地面を削りながら失速の手伝いをした。

バイクが止まり、そこでようやく僕は藤村先生から身を離し、地面に足を付いた。安堵の溜息をつく。

「……藤村先生、何をしたらこうなるんですか」

「え、つと、あの、」

「先生はいつもこうでしょ。衛宮の機械類を触るなと言つたら触るし、あいつの修理の邪魔はするかと思つたら僕の料理まで邪魔し

たりして、構つて欲しいのはわかりますけれど 」

「あの！ どちらまでですか！」

僕の話を遮つて、先生は大声を上げた。その様子に僕は驚き、もしゃ解つていのうかと思った。昨日鏡で顔を見たが、三年前と変わつたところはなかつた（はずだ）。それとももしかして、もう人の事を忘れているのだろうか。

「忘れたんですか？ 貴方の大好きな弟分の、虚月識ですよ。タイガーなのに鳥頭ですか」

僕がそれを言つたときには、背後に土郎君と、もう一人誰かがいた。時刻は午前六時四十五分。土郎が起きていても不思議ではない時間帯だ。

そんなことを思つていたから、僕は藤村先生の様子が全く解つていなかつた。

「 識！ もう、死んだかと思つてたじやない！ ！」

先程の三倍ほどの声を上げて、先生は僕に飛びついた。ジャンピング抱きつきである。あまりにも唐突で全体重をこちらにかけてきたため、僕は為す術も無く藤村先生に押し倒される。ぐつ、とつめき声を漏らしたが、先生の耳には届かない。

「三年よ二年！ もう、あの事故で倒れたあと、私がどれだけ心配したと思つてゐるのよ！」

「あの、せんせ 」

「いいわ、タイガー扱いも許す！ ええーい酒持つてこーい！ 識が帰ってきたぞーっ！！！」

まず落ち着いてくれ。僕はそう思いながら、僕を見下ろしている士郎君を見る。その件の士郎君は僕に頬擦りまでしている藤村先生の様子にあっけに取られた様子もなく、ただ僕を見つめていた。隣に立つ紫髪の少女も同様である。

「 識兄へへシキにいへへ！？ いつ退院したんだよー！」

「士郎くん頼む、こいつどけて！」

藤村先生に押し倒された状態の僕を見て目を丸くする彼に、僕は必死の思いで頼み込んだ。

「都合主義っぽいなー。  
下手だね、どうも。」

## 直死の魔眼／？ chapter two

僕の復帰は三人に歓迎された。紫髪の少女 間桐桜とも面識のある僕は、衛宮ファミリー（僕命名）に認定されているようだつた。朝食を貰いたいと言つたら是非と元気のいい返答をされ、そのままVIP待遇を受けた。いつにもなく、三人がハイテンションである。

さて、料理を待つ間何をしようか……

僕は少し考え、藤村先生　いや、藤ねえといつたほうがいいだろ？　藤ねえと想い出話に耽ることにした。

「それにしてもさ、藤ねえ」

「ん～なになに？　私は今どつても氣分がいいから何でも聞いてあげる。特に識の話はね」

「最後に藤ねえが僕にキスをしたのは僕が小学六年生の頃だつたよね」

「なつ！？　ななな、なんで覚えてるの！？」

僕は爆笑した。

台所からは、士郎が吹き出す音が聞こえた。

藤ねえの顔からは、湯気が立つていた。

あの時の思い出は忘れようとも忘れられない。酔っ払った虎は手

に負えないと思いつた時である。その後自分の行ったことに対する羞恥で、一週間ほど僕と顔を合わせることもできなかつたんだつたか。

「僕はいろいろ覚えてるよ。……それにしてもどうしようつ、今日、学校あるの？」

「話題の転換が早いわねえ。まああるわよ。識は私のクラスだから、実質転校生みたいな扱いになるかもね。HRで自己紹介でもする？」

「うん。……高校三年生までの勉強、終わらせておいてよかつたあ

「あー……そのことは当時、驚いたわ。もともと高認とつて大学に行くつもりだつたんでしょう？」

「まね。けど、中学校の間に高校一年までしか終わらなかつたから諦めた。あと一ヶ月あればなあ」

「識、本当に頭いいわよねえ。……こりや、今までの内申を一気にいいものにすることができるかもね。識なら」

「テストで満点を取ればモーマンタイ。簡単だよ」

簡単つていつた人、はじめて見たわと藤ねえはテーブルに突つ伏していつた。上目遣いで、頬杖をついている僕を見上げて、

「……よつし、先生と一緒に学校に行きましょうー！」

「いや、土郎君と行くからいいよ」「いいえ、貴方は私と来るんです。色々あるんだからねー手

伝つてもうひつわよ~「

藤ねえは、とても張り切つていた。こりや歓迎パーティーでも開かれるかもな、と思いながら僕は運ばれてくる料理に期待した。

++

とりあえず、僕が学校に登校してから下校に到るまで、僕は様々な人物と再会を果たした。柳洞一成、美綴綾子、穂群原三人組、：旧知の後輩が同級生というのも変な感じだが、年上として認識されているだけまだいいだろう。

しかしそれでも、遠坂凜には出会えなかつた。

……そつ、出会えなかつたのだが僕は今、彼女と出会つてゐる。

たまたまだ。下校しようと鞄をとつて、廊下に出たら彼女がいた。

視線が合つ。彼女は息を呑んで、僕の復帰に驚いていた。それが他の人物の驚き方とは違つ、安堵の混じつたものもあり、しかし若干恐怖を含んだものもあることはすぐに見抜けた。初め僕なんと声をかけたらいいか解らなかつたが、取り敢えず声を掛けることにした。

「……久しぶり」

夕焼けに照らされる廊下。

「……お、お久しぶり、です

虚月先輩」

「凛ちゃん。お見舞い、ありがと。」

「え？」

僕は彼女に向かって微笑んで、また明日と手を振った。下駄箱では土郎君が待っていることだろう。僕は急ぎ足になりつつあつたが、彼女の「待つて！」といつぱりびよみてその歩みを止められた。

「どうしたの？」振り返ると、遠坂凛はどこか不安を持った表情で僕を見ている。

「わ、私を 許してくれるんですか？」

「……許すも何も、君は何か悪いことをしたのかい？」

僕がそう言つと、彼女は驚愕して僕を見る。「覚えてないならいいんです。思い出さなくて」彼女は懇願するよつに言つた。夕焼けに照らされていても、彼女の顔は暗かつた。彼女がそこまで言うのだったら思い出してもしくない何かなのだろう。それならば、思い出さない方がいい。そう思いながら、僕は改めてまたね、と声をかけて立ち去った。

## 直死の魔眼／？ chapter three

その日のその後にあつた出来事は特に無かった。ただ単に、僕は自宅へ帰ると通帳と財布を持ってきて自分の財産を確認するため、また生活費を確保するために銀行へと向かつたくらいだ。

商店街に行くと、会う人会う人が驚きの表情を見せながら、僕に色々な言葉を投げかけた。慰みの言葉や、励ましの言葉。その他にも色々あつたが、彼らは昔のままに僕を受け入れた。

今日の晩ご飯は魚料理だひやつぽい、とテンションを上げながら僕は帰路につき、その日は晩ご飯を食べて、寝た。その次の日もほとんど同じルーチンで、士郎の家に行き、学校に行き、食材を買い、寝る。その間に僕は過去の僕の友人らと再開し復縁していった。みんなは僕が驚くほど昔のままに接してくれたのがとても嬉しかった。

それが数日続いて

僕が目覚めてから六日後のことだった。商店街で魚屋のおじさんに値段交渉をして、一百円値切ることに成功し魚を買った直後に士郎がやってきた。彼の両手にはパンパンになつたビニール袋が提げられている。僕はそれを一瞥して士郎に視線を向けた。

「やあ

「よつ」と士郎は愛想のいい笑顔で答えた。「識兄も買出し?」

「まあそんなところだね。……にしても大漁だなあ

僕は彼の持つている食材を詰め込んだビール袋を見ていった。士郎は微笑を浮かべ、返事をする。

「よく食べる虎がいるからな。識兄もくる?」

「うーん、どうじょうか」

顎に手を当てて、齒む。食材は冷蔵庫に入れておけば安心だが、世話になるところのものぞいか気が引ける。

僕は 敢えてここは帰る足に任せて晩ご飯を「うそうにならこ」とした。折角のお誘いだから、乗らなきゃ損と思いながら僕は首肯し、彼の家へと向かった。

その日の晩ご飯は大いに盛り上がった。久しぶりに藤ねえと士郎と共にする食事はいつもより美味しく感じた。桜ちゃんは僕に大盛りのご飯を注いでくれて、どうやつて食べようかと僕の頭を悩ませてくれた。それに比べて僕よりも多めにつがれたご飯をモノの数分で平らげ、「おかわり!」と元気よく桜ちゃんに要求する。

そんな光景を士郎と共に笑いながら僕は見ていた。

と、ぱくぱくと料理を口に運んでいた士郎がふと思い出したように声をかけた。

「なあ、識兄」

「ん?」

「これから、どうするんだ？」

質問の真意がわからないが、取り敢えず答えたことにした。

「家に帰つて、それから寝て……明日は学校にいくだけかな。いや、明日は休みか。ならどうするかな……」

ふんふん、と土郎は熱心に話を聞く。やけに食いつきがいいな、と思いながら僕は日常の生活ルーチンを話した。すると彼はうつむくとお坊さんのように唸ると、

「なあ、ここに住めば色々と手間が省けないか？」

「あー……確かにそうかもね。良い提案かもしれない。僕が一人暮らして変に無駄遣いするよりも、監督してくれる人がいたほうがいい。……勿論、一人は自宅からここにきてるんだよね？」

「ああ、そうだよ」

土郎から返事がきた。桜ちゃんは朝からこっちに来ているらしくて、なんとまあ健気なこと。邪魔しちゃ悪いとは思うが、他人より自分、不便より便利。

「それなら、確かに一緒に住んだほうがいいね」

かくして、僕はこの家に居候することになった。僕が土郎から聞いた、生まれて初めてのわがままでもあつたし、嬉しくもあつた。

藤ねえも、藤村大河という教師の立場で了承してくれたが、ただ

一人桜ちゃんだけが反対した。決まったときには小声で「もしものことがあつたら……」と言つて顔を赤らめていたが、あれほどのような意味なのだろうか。まさか何か想像しているのか、と思いながら僕は後輩の女子（いかがわしい妄想が大好きな子だ）を思い出す。

……うん、桜ちゃんはそんな子じゃないと僕は信じている。

僕は士郎くんに部屋を一つ貸してもらつた。そこは切嗣さんの部屋だつた。

「まだ何も手をつけてないから親父の荷物だらけだけど、勘弁してくれ」

他に部屋はありそだが僕がここを指定した。それだといふのに謝つてくる士郎君はとても律儀だ、と思う。その律儀くんに僕は「こっちのほうがやりやすいからなにより」と返事をして、おやすみとあいさつを済ませた。既に隣の部屋から僕が持つている武器や礼装は持つてきていたため、魔術師の工房である部屋をえることは僕にとって幸運だつた。

だが、そこで少し疑問が湧いた。自身の父親の部屋が、一種の魔術工房化していることを彼は知らないのか？

あの様子だと、その通りだ。

「教えたのか

あの人らしいや、と僕は思つた。敷いてあつた布団に入り、ぼくは深い眠りについた。

真夜中に田が覚めた。なぜかは解らない。が、僕は危険を察知した獣のように目を見まし、足の思つままに道を歩いていった。暗い道を、僕はゆっくりと歩く。まとわりつく闇を払うよし、僕はナイフを握った手を振るひ。

数々の血を吸ってきた わけでもないが、ただ一人の男を殺めたこの白刃を、僕はお守りのように持ち歩いている。それは、いつどこで敵に狙われてもいいように、という心境からと、願掛けめいた、「これを持っていれば大丈夫」ということからだ。

それとも、僕は 虚月識は、敵を求めているのだろうか。

解らない。

わからない。

果たして、敵はそこにいた。「それ」そのものは敵ではなかつたが、それに付き添つている大男は、僕の敵だ。

「 久しぶりだね、イリヤスフィール。切嗣さんへの憎悪はなくなったかい？」

「三年ぶりね、シキ。キリッグへの恨みの代わりにあなたに対する憎悪なら以前の倍になつたわ

上

純白の少女 イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは僕

にいう。確かに恨むのも無理もない。それまで切嗣を殺すという憎悪だけを頼りに生きてきた少女にとつては、衛宮切嗣という男が最後までイリヤスフィールという実の娘を愛していたという真実は酷だつたかもしない。そうしたほうが、純粹な殺意だけで生きてこられたのだから。

彼女の表情は、以前よりも大人びていた。成長した様子はないものの、内面的な成長はとても大きかつたようだ。僕は彼女の浮かべる、朧月のような淡い微笑を見ながら、ナイフを鞘から抜いた。

「 僕は聖杯戦争には関係ないはずだが」

「あら、気づいてないの？ 貴方の右腕 聖痕>>ステイグマ<<が刻まれてるわよ。マスター候補を殺すことはマスターの当たり前の行動もあるし、貴方を殺すことは私の悲願になりつつあるの」

純白の隣に立つ、岩石のような大男が白い吐息を出す。霧雨氣同様の褐色肌に彩られたその肉体は、腰に巻かれた布で秘部を隠されているだけではかは裸だ。そして……その右手には、岩を削りとつただけの大剣が握られていた。

「やつちやえ、バーサーカー」

斧としても使えそうなその剣を構えて、その大男は咆哮した。

「ああ 殺し合おう」

僕は、歓喜してそういった。



虚月識の両目が紅く輝く。その瞳は伝承に伝わるそれ　直死の魔眼そのものだった。月光に照らされたそのナイフは本来の持ち主よりも、現在の持ち主に似合つて見えた。藍染めの浴衣に似た、動きやすそうな服装をした彼は時代錯誤にもほどがあるだろう。

だが、そのことはどうでもいいこととして扱われる。その佇まいは一種の神秘性を放ち、まるで遙か高みにいる『何か』のような性質を醸し出していた。

それが、少女には気に食わない。靈格として識を圧倒的に上回るバーサーカー　英靈を使役していながらも、彼女が彼を恐れる点はそこににある。

相手が誰であろうとも、気にせず殺しに来る。彼が戦闘を行うときには思考されるのは敵をどのように解体するかのことでしかない。彼女が彼を恐れる点はそこにある。

その彼が直死の魔眼という最凶の魔眼を持つていてそれを先日知つた彼女は、あまり時間はかけられないことを判断した。

聖杯戦争が本格的に始まる前に、バーサーカーの『十一の試練』>ゴッドハンド<sup>×</sup>を司つつかさど<sup>×</sup>る「点」を突かれあつけなく敗退するわけにはいかない。それではアハト翁への面子が立たないというものだ。

そして、イリヤスフィールは識が少なからず魔術回路を持つていることを察知していた。下手をすれば何かの要因で戦闘中に召喚が

行われるかもしない。

そうなれば、この男が最優と言われる「セイバー」のランクを持つサーヴァントを呼び出すことは眼に見えていた。それほどまで強力な人物であると、彼女は疑わなかつた。事実、彼女との前回の邂逅において彼は、彼女に会つためだけにAINツベルン家の総本山を叩きに来たのだから。

そして、立ちふさがる敵を全て屠り、彼女に会つたのだ。それが彼女には信じられないことでもあつたが、識の能力を裏付けするにはそれだけでも十分だろう。

「…………！」

バーサーカーが叫び、識に突進する。その速度は音速に達するかと思えるほどだつた。識に肉薄したバーサーカーは、横薙ぎに大剣を振るう。

だが、それはいとも簡単に回避された。識の表情には笑みさえ浮かべられている。それが、彼が以前よりも強くなつていることをはつきりさせていた。

サーヴァントというのは人間とは全く違う存在だ。本来なら触れることのできない靈体である。そして、その正体は生前、伝説によるほどの功績を上げた『英雄』だ。そしてそれは聖杯戦争の要となる聖杯のバックアップを受け、生前よりも強化されて召喚される。

このバーサーカーは全サーヴァントの中でも最強と言える力を持っている。ただでさえ圧倒的な戦力を、『狂化』によつてさらに凶悪なものにしている。理性を奪うことにより本来よりも能力を底上

げするといつものだ。

本来これは弱いサーヴァントに使われるものだが、アインツベルン 始まりの御三家と言われる聖杯戦争の古参の一つは、それを最強と言える存在に使用した。

その力は圧倒的。

それを上回る速度を見せた”人間”は、迷わずバーサーカーの右腕に走る『線』を断ち切った。そしてそのままカウンターとして、バーサーカーの左拳を受けることになる。

けれど、その拳さえも識は躱した。

振るわれた正拳に飛び乗つて、彼はそのまま左手の先の線も断つ。

一秒の間に、彼はバーサーカーの両手の機能を停止させた。

「！」

切り落とされた左手と右腕。バーサーカーはそれを痛がる様子もなく、強烈な頭突きを識に浴びせた。それを防御したが、それだけで識の左腕は砕けた。だが左手一本の代償に命が助かるのだから良い、と識は判断する。

砕けた腕からは血が吹き出している。自らの軌跡が魔法陣を描いていることに識は気付くことはなかった。イリヤスフィールでさえ気付くことができなかつたのだから魔術師でもない彼が気付くことができるはずはない。

「 斷ち切る! 」

瞬間、識の姿は消えた。そして、白刃が煌めきバーーサーカーの首筋を斬りつけ、通りすぎる。ザザザザザ、と大きな音を立ててブレーキをかける。目に映らない速度で彼は駆け抜け、そして、また駆けた。あまりにも直線的な攻撃は、しかしバーーサーカーでさえ捉えることはできない。

業の壱。虚月の一族に伝わる業の一つ。七夜の体術に似ているとも言われるが、それを圧倒的に上回るほどの速度、威力を持つ。

蒼い閃光は何度も何度もバーーサーカーを斬りつける。その間にもバーーサーカーの両腕は回復していくが、回復していく合間合間に別の部分の”死”を断ち切られる。

その姿は、人間。

その刃は、神速。

月光すらも翻弄していた彼は、単純なスタミナをセーブする為にその攻撃をやめた。既にバーーサーカーの武器は捨て置かれている。それを使う分だけ自らの速度が敵に劣つていくことを彼はその本能で読み取っていたためだ。そのことを思い、識はバーーサーカーの手が自分に伸びる前に距離を取れると確信していた。

だが、その一瞬の静止を狙つて、バーーサーカーはその両手を伸ばし 捕える。

万力のような握力に耐えるために、識は歯をくいしばる。どちらかの手が使えればよかつたのだが、残念なことにすべての機能を止

められていた。骨がみしみしと音を立て、識は顔を歪める。バーサーカーは彼を、地面に叩きつけた。

ぐひゅり、とこう音と共に彼はたたきつけられた。それでもなお生きていこうことがイリヤスフィールにも、彼自身にも驚きだった。

「ああ、お前はオレを満たしてくれるんだな。

なんて幸運だ。オレは田覓めてからすぐに、戦える！

みたせ、みたせ、みたせ（閉じよ、閉じよ、閉じよ） 我が欲望を、我が殺戮衝動を、我が全てを満たせ！

ここに契約しよう。 オレは、お前を犯へへじゅへす。その肉片までもしゃぶりつこいやうひじゃないか

そして、魔法陣は起動した。識は自分の言葉が聖杯戦争のサーヴァント召喚の言葉になるとは思つてもいなかつた。だが、この現状を打破するにはそれが一番確実であるということを思えば、彼にとってそれは幸運であつた。それに対して、イリヤスフィールは己の失敗に表情を歪める。

まさか、このようなタイミングで、しかも偶然呼び出されるとは思いもしていなかつた。イリヤスフィールはバーサーカーに石斧を拾わせると、攻撃するよう指示した。

だが、遅い。

あたりに立ち込める煙の中から、芒、とした輪郭が浮かび上がつた。希薄なそれはだんだんと濃くなつていきた。

「オレを呼び出したのはお前か？」

それは、とても現代風の格好をしていた。服装は紺色の学生服の上に真っ黒な外套を羽織っている。あまりにも不釣合なその格好をした青年の両手には黒い棒が握られていた。そして、それには七つ夜という銘が刻まれていた。棒に銘が刻まれていることに違和感を覚えた識は、それが飛び出しナイフだということに気がついた。

「もしもそうなれば、初めまして、我が麗しきマスター。  
しがない殺人貴を『指名頂き、どうもありがとうございます』

演技じみた、仰々しい動作で彼は深々と頭を垂れる。そして、その顔を上げた。

その青い双眸は、欄>>らんくくと輝いていた。

それは、識の真逆。

「そして、純白の人外と古代の英雄よ。

よつこそ、蜘蛛の糸で作られた惨殺空間へ」

彼は、薄く笑みを浮かべた。

【クラス】  
バーサーカー

【マスター】  
イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

【性別】  
男性

【身長・体重】

253cm・311kg

【属性】

混沌・狂

【真名】  
不明

【宝具】  
敏捷  
【幸運】  
耐久  
【魔力】  
筋力  
A A B A A A +

【クラススキル】

狂化：B

理性を代償として能力を強化する、バーサーカーを特徴付けるクラス別能力。ランクBなので、大半の理性を失う代わりに全ての能力値が上昇している。

### 【保有スキル】

戦闘続行	：	A
心眼（偽）	：	B
勇猛	：	A
神性	：	A
	+	

## 直死の魔眼／？ chapter five

彼はそう宣言し、同時に　姿が消えた。

「　！？」

バーサーカーは慌てて辺りを見回す。だが、どこにも見えない。だが、どこから、小さな風切り音が聞こえている。そして、それが大きくなり　バーサーカーの腕を切り落とした。

「　！？」

巨大な石斧を振り回し、飛び回る小蠅を振り払おうとする。だが、柔らかい動きで男はそれを悉く回避し、あろうことかその先端に飛び乗つた。

「せんさ閃鞘・はっせん八穿」

次に視認できたときには、男はバーサーカーの頭上にいた。そして、右手のナイフで彼の左目を突き刺す。そして、それを起点にして半回転し、バーサーカーの巨体に踵を打ち込む。そして、もう片方のナイフで狂戦士の右目を穿つた。

そして、蜥蜴のようにバーサーカーの体に張り付いた彼は、最後に右足で木の幹のような首を蹴り飛ばし、その衝撃で彼から離れる。勿論、深々と突き刺さったナイフは同時に抜けていた。

「　！　！　！　！」

激痛に、バーサーカーは絶叫する。そして、恐らく近くにいるであろう敵を攻撃するために石斧を振るう。

しかし、それは全て無駄。

Bランク以下の攻撃が通らないバーサーカーに、大きな傷を負わせた。それは聖杯戦争序盤では大きな痛手となる。マーダーは相手が激昂したことを確認すると、追撃はせずに、小出しの攻撃で相手を翻弄することにした。

イリヤスフィールは敵をマスターしかもち得ない『眼』でみていた。相手のサーヴァントのスキルやステータスを表すその数値を見て、彼女は驚いた。

「マーダー……殺人鬼？」

クラス名は、マーダー。

イレギュラーサーヴァントとして、この青年は召喚されていた。持っている武器は日本の退魔一族『七夜』が用いた武器だということは読み取れたが、それ以外の能力が彼のステータスからは読み取れなかつた。

否、あるといえはひとつだけある。

「蒼の淨眼に、直死の魔眼ですつて？」

そんな、神秘の一重保持者は聞いたことがない。そもそも直死の魔眼を持っている者たちは全て生きているはずだ。そして、淨眼を持つている七夜の一族は既に滅びている。その矛盾を解釈するため、イリヤスフィールはすぐに一つの仮説を立てた。

「まさか　七夜一族の生き残り?」

その言葉を耳聴く聞きつけ、バーサーカーに小さな傷を負わせていたマーダーは足を止め、識の近くまで後退する。

「『名答』といったところか。純白の人外。……いや、人造人間>>ホムンクルスくくか? 瞳の色からしてそうだらう。そもそも、オレの眼で見れないものはない」

そう言つと、彼は自らの両目を指して言つた。

「この両目、オレは一度壊していてね。知り合いに頼んで、壊れたオレの眼を修復できる眼を持ち出して、それを使って修復し、オレは両目を取り戻したのさ。まあ、おかげで死まで見れるようになつちましたんだがね。

邪魔で仕方ないよ、この線は。

それで? これ以上お預けを食らつて黙つていられるような”狗”じゃないぜ、オレは

氣だるげに話しながら、彼は逆手に構えた飛び出しナイフをクルクルと回す。敵に引く気がないことを読み取ったイリヤスフィールは、二人の『直死』持ちに出会つたことを僥倖と思いながら撤退を決めることにしたようで、小さく溜息をつくと、七夜に言つ。

「残念だけど、これ以上のダンスは遠慮しておくわ。今日は準備不足もつたし、はじめからサー・ヴァントと交戦するつもりはなかつたから。

じゃあね、シキお兄ちゃん

そう言つと、イリヤスフィールは「戻りなさい、バーサーカー」と回復しきつた狂犬を呼び戻す。彼はイリヤスフィールをその大きな手で優しく抱えると、瞬時に姿を消した。それから少しの間響いていた、象が地面を蹴り、走るような音はすぐに聞こえなくなった。

「まったく、呼び出しの方法が雑なマスターだ。守護者としての契約を果たした後、無茶な方法で呼び出されたのは数しれないけど、唐突すぎるのはいただけないな」

バーサーカーの気配が察知できなくなつてから、マーダーは刃を収納し、ナイフを仕舞つた。その動作があまりにも速すぎて、識にはナイフがひとりでに消えたようにしか見えなかつた。

識はほつゝと感嘆してからナイフをしまつ。それから彼は答えた。

「そう言われても僕はお前がなんなのかよく解つていないし、なぜ出てきたのか全く見当がつかない」

「それじゃ、ただの縁だと思えばいいさ」

「”ただの”縁、か。  そうだつたらどれだけいいことか」

マーダーの言葉に、識は首を傾げた。

【クラス】 マーダー

【マスター】 虚月識

【性別】 男性

【身長・体重】 173cm・60kg

【属性】 中立・悪

【武装】 短刀「七夜」・短刀（銘は不明）

【筋力】 C 【魔力】 E

【耐久】 D 【幸運】 B+

【敏捷】 A++ 【宝具】 ??

### 【クラス別能力】

狂化：D

殺人鬼を特徴付けるスキル。彼の場合殺人鬼と言うよりも「殺人貴」なので、ランクは低い。しかし、一部の能力値の上昇はある。

気配遮断：B

アサシンのサーヴァントではないため、本来ならばランクは低いが、七夜の生き残りということも相まってランクBとなっている。任意型ではなく常時発動型のため、余程神経を集中していなければ、並のサーヴァントでは戦闘中でも何度もマーダーの姿を見失うだろう。

### 【保有スキル】

・心眼（偽）・（真）：B

虫の知らせや第六課に属するもので、天性の才能による危機予知

能力（前者）、また、経験に裏付けされた予測による危機回避。どちらも持つ彼は、並のサーヴァントでは傷ひとつ付けられない。

- ・宗和の心得：C++

同じ相手に同じ技を何度も仕掛けても、命中精度が下がらない特殊技能。気配遮断のスキルと相まって、高い効果を發揮している。

- ・投擲（短刀）：C++

このランクになると、弾丸並の速度での投擲が可能となる。

- ・直死の魔眼・淨眼：EX

本来ならばどちらも先天性のもので、両方を持つことは不可能だが、特殊な方法で手に入れている。

淨眼は、今は「生き日本の退魔一族」「七夜」だけが持つことが出来た人外・靈体を見る・触れる事ができる特殊技能。強いものになると未来視の域になり、敵の行動がある程度予測できるようになる。

直死の魔眼は、モノの死を見る事ができるという未来視の一種。それを物理的な方法でなぞりながら断つことによって、それを真の意味で「殺す」事ができる。殺された箇所の再生は不可能。点を突くと、突いたものそのものを「殺す」。識の持っているものとは違ひ、己の理解している範囲内での死しか見ることができない。しかしサーヴァントになつてているため、万物の死が見れるようになつている。現在確認されている保有者は三名だけだが……？

## 直死の魔眼／？ chapter one

どうして、こんなことになってしまったんだろうか。

僕の目の前には、心臓を貫かれた土郎がいる。なぜそうなったのか、僕は知り得ていたのに 何も手を出すことが出来なかつた。マーダーは彼を した敵を追いかけて行つてしまつた。そして、つい先程僕の隣を、真つ赤な外套をはためかせて、サーヴァントが駆けていつた。おそらく、彼と戦つていた別のサーヴァントだひつ。

「まさか 召還する前に倒されるとほ、ね」

弟分が殺されたというのに、僕は冷静だつた。正確には、一周回つて冷静になつたというべきか。とにかく、僕はこの状況を把握するので精一杯だつた。

だから、近くに誰かが近づいてきたら、敵としか認識出来なかつたのだろう。

だれも居ないはずの廊下に、革靴の音が響いた。

僕の行動は迅速だつた。敵の姿を見もせずに、腰に差していたナイフを抜く。そして、獸じみた動きで振り向き、そのまま跳びかか

刃は、ツインテールの少女の動脈に向かつていた。

る

「……、……キー。起れ。……のやれいー。」

「田覚、シ。仕方第一の」

「……いねいー」

田が覚めた。田の前には金髪赤眼の式と田元が隠れた一メートルほどの田体があった。

いや、いねい。

金髪の式(?)は犬歯剥きだしでこいつを睨んでるし、つてかマウント取られてる。一メートルくらいのおっさんはその後ろで何やら詠唱している。仏教徒的な詠唱だったが、しかしながらこいつ、こわい。

氣づいたら右手にナイフ。どうしようか、これを使えば逃げ出せる氣がするけど逃げられる氣がしない。どうせ夢なら女の子にっぽいのハーレムウハウハとかがいいところに、なんでもかこおっさんと怖い式が出てくるのもつにやだ。

「なにこいつひんだオマエ」

「夢だから」」

「「俺たち（我々）の出番があるのだろうが（あんじやねえか）！」

「お願いします、夢から出て行ってください。そして藤ねえでもいいからかわいい女の子一人連れてきてください」お願いします」

マウントから抜けだしての即行土下座。これで勝つ。

「「だが断る」」

ネットスラングにネットスラングで返す変人一人。金髪の式はよく見たら男だった。女にしか見えないっていうか女装している。なにこれこわい。

「いいか、シキ、これは夢だ」「そして、我々は貴様の持っている刃（の持ち主に）殺された」

「復讐鬼ー！ 誰かー、誰か助けてー！」

一瞬目に包帯を巻いている、マーダーそっくりのイケメンの姿が浮かんだが、その途端にマーダーが出てきてその一人を殺した。なにこれこわい。

「マスター、無事か！」

「あ、うん」

「心配したぞ、こきなつど」に行くかと思つたが……」

「へじへど。あれ、コイツ、こんな熱血キャラだつて。ああこれ夢か。

そしたらなぜか田舎帯を巻いているイケメンが登場。え、厨二病?

「七夜 なんでおまえが」「

「そういうオマエ、なんだこりにいるんだー。遠野ツー。オマエはアルクニイドとロンドンに行つたはずじゃ」「

「ふげり。もあもあもあ。」「れもれもれも。」「ひへん。

「……」

真つ黒い球体が現れて、一人を呑み込んだ。

なにこれこわい。

「起きり、でなことその無防備な顔にキスするだ

声が聞こえた。

目が覚めた。先ほどの夢は何だったのだろうか、ひどい悪夢だった。

「なんだ、そんなに私のキスが嫌か」

田が覚めると、田の前に橙子さんがいた。思わず凍りついた。第一ボタンの留められていらないワイシャツからは白いつなじが覗いている。妖艶な笑みを浮かべて僕を見ていた彼女は、「おはよう」と言つて僕の上から退いた。上はワイシャツ、下はヴィンテージ仕様のジーンズを履いていた。うん、朝から美人を見れるとは。しかもなんかエロい。眼福。

何考えてんだ僕は。

「おはよー」「やあこめか

「しかしながら、なんで衛富士郎の家にいるんだ」

「んん？　ああ、かくかくしかじかのことがありますて」

「なるほど、わからん。朝のお前はやはり頭が回らなことよつだな」

「いやあ

「褒めとらさんぞ」

「え、マジで」

「大マジだ」

などとやり取りをしてから、僕と橙子さんは世間話を始めた。式さんと幹也さんはどうなってるのかとか、なんであんな意味不明なセリフを言ったのかとか、

「……って、なんで橙子さんがここにいるんですかー…？」

「なんだ、居て悪いか。それに今頃か」

「いえ、悪いってわけじゃがないですけど……どうやって入ってきました？」

「ん？ ああ、結界があったから、ちょっとと、魔術でステルス化して、忍び込んだ」

「子供の悪戯みたいに言わないでくださいー！」

「いやあ、だつて敵意持つてなかつたら普通に通すタイプのやつだつたからな。あとから後悔したぞ」

「あんたそれでも世界トップクラスの魔術師か！？」

「失礼な。伽藍の洞の社長だ」

「やつですけどー」

けらけらと彼女は笑う。しかしながら、この人、僕に対しての扱いが違うじゃないか。もつと幹也さんにするみたいな扱いをしてくれてもいいじゃないかとは思う。言葉遊びではぐらかされた気がしてならない。

取り敢えず僕は着替えるつもりだったので、彼女に部屋から出でもううように催促する。しかし彼女はソレに応じるつもりはない。数瞬前から、虚空を睨みつけていた。おーい、橙子さんと声をかけても無駄だつた。

「なあ、識」

「はい、なんですか」

「おまえ、幽靈でも飼つているのか」

「は？」

幽靈を”飼う”？憑かれるのではなく？何を馬鹿なと一瞬思つたが、僕はすぐに幽靈が何を指しているのか理解した。僕は”幽靈”に実体化するように声をかける。眠いんだから起こすなよ、といふ返事と共に彼は姿を表した。

昨日と変わらない、紺色の学生服。その上に羽織った、真っ黒な外套。彼は僕の真横に佇んでいた。黒色の瞳で、じつと橙子さんを見るマーダー。その二人の間には、どこか、知人同士の空気が流れていた。

馬鹿な、と思つ。なにをどうすれば七夜の一族の生き残りと、名門蒼崎の長女が知り合いなのだろうか。僕は頭に浮かんだ考えを振り払つと、橙子さんに彼のことを紹介する。

「昨日召喚した、マーダーです。正式に聖杯戦争に参加する」と云は、まだしていませんがね」

上の空だった。

「まさか、コイツを召還するとは。しかし、なんでコイツが英雄などに……？」

橙子さんがボソリとつぶやく。なんと言つたかは聞き取れなかつたが、顎に指を当てて考え方をしてくるようだ。いつなつてしまつては梃子でも動かない。

仕方ない。僕はマーダーに周辺の見回りを頼む。彼は眠そうにあくびをしながら靈体化し、姿を消した。それを見てから僕は上着を脱ぐ。その途端橙子さんは甲高い声を上げると僕に背を向けて、何やらぼそぼそと独り言を言つていた。

何を驚いたのだろうか、僕の行動にだつたらひょと困るなあとが思いつつ学生服に着替える。

「そういえば、サーヴァントの召喚は何体程度されたんでしょうか

「解りん。その辺りは言峰神父にでも聞かないとわからないだろ。今日中にでも言峰教会に行くか？」

「それもいいですね。マスター登録も必要ですし」

そんなことを話していると、丘所の方から「識兄ー、『J飯できたよー』という声が聞こえた。もつそんな時間だったのか。

僕は橙子さんを促して、部屋を出た。

「聖杯戦争、か」

十年前の切嗣のようなヘマは、絶対にしない。

僕が聖杯を  
破壊する。

今月いっぱいは毎日更新が継続できる……かも

朝食後、久々に僕は士郎くんと勝負することになった。竹刀剣道は僕の得意分野ではないのだが、可愛い弟分に付き合つのも一興と思つてやってみたのが始まりだった。案外実戦経験が役に立ち、また実践にも使える動きがあるので、僕から彼を誘うこともじばしばだった。

それもこれも三年ぶりである。僕にとっては昨日のような出来事も、彼にとっては三年も前の色褪せた記憶だ。

「腕は鈍つていないよね、士郎

「やつひひん

審判は藤ねえ、観客は桜ちやんと橙子さん。復活の舞台にはちゅうどいい程度だらう。

「構え

「つもは聞くことのできない、真面目な声が聞けた。

空気が固まる。士郎から発せられる敵意があまりにも懐かしく、僕は笑みを浮かべて、竹刀を固く握り直した。

「始めー。」

その一言で、士郎くんが僕に向かって駆けた。一撃田はばか正直

な面。僕は竹刀の腹でそれをいなすと、“空いている左手で彼の頭部に掴みかかつた”。それを読んでいた彼は頭を下げる、そのままタックルする。僕の腹部に彼の肩が食い込んだ。

小さな呻き声と共に、僕は地面に倒される。

それで、目が覚めた。僕らがやっているこれはただの竹刀剣道ではないと、久々に思い出した。

擬似訓練。僕から言い出したのにすっかり忘れていた。

左手をついて受身をし、そのまま立ち上がる。一撃目を入れるために迫ってきた竹刀の先端を、首を動かして避ける。

+

士郎の放った突きは、いつも簡単に躱された。識は竹刀を大きく振つて、士郎の胴を取りに行く。士郎は咄嗟に左手を離して、その一撃を守りに行つた。

バットで殴られたような衝撃。彼の肘から先は痛みで麻痺した。激痛に顔を顰めながらも、彼は後方へ飛ぶ。それを追うように、体勢を立てなおした識が肉薄した。片手で繰り出しているからこそ出せる蛇のような動きはどこに来るのかの予測がつかず、士郎は防御するので手一杯だった。

そこに、大ぶりの一撃がはいる。それを好機ととり、士郎はそれを弾いた。

だが、それが失敗だった。

弾かれたのは、竹刀だけ。識は背中を大きく反らせ、士郎の方に踵を打ち込む。識はその反動で後ろに飛び、竹刀を掴んでネコのように着地する。士郎はそのまま吹き飛ばされ、背中から床に打ち付けられた。

「僕の、勝ちだね」

「やっぱり識兄にはかなわないや……はは

大の字になつて、士郎は目を細めた。この痛みも、あの動きも、全て三年ぶり。彼には全てが懐かしかつた。彼はよつやく、自分の義兄の復活を実感した。

+

結果は僕の圧勝に終わった（よつにおもえる）。しかしこちらはブランク付きとはいえ、彼から何度も手痛い打撃を食らつている。それも、実践なら致命傷となりうるもの。僕が眠りこけている間、ずっと訓練してきたようだ。

だが、今回のことでの十分解った。どうやら、昨日の僕の動きは殺し合いと意識していたからできていたようで、普段の僕の運動能力は著しく低下していると考へて差し支えない、と。

「これは、言峰神父にでも鍛えてもらひしかないかもしないな

あのマツチヨ神父ならば、何とかしてくれるだろ。切嗣さんの

宿敵に鍛えてもらつのは少し忍びないが、知り合いの中で最も強いなら彼か、式さんだらう。もう何年も戦うことをやめている式さんに助けてもらつよりも、ついこの間まで戦いに戦いを重ねていた彼と訓練するほうが余程いいだらう。

そんなことを考えているうちに、士郎の手あてが始まつた。どうやら腕に受けた一撃が大きかつたようで、骨に鱗が入つていたようだ。手加減したつもりだったがまさかそんなことになつていろいろとは思いもせず、僕は少し驚いた。士郎は「このくらいへつちやらだよ」と笑いながら言つていたが、果たしてそれは何故だらう。僕はそれが気になつた。

「識、それじゃあ行くか」

「え？ ああ……解りました、行きましょう。士郎、それじゃあまたあとで。ちょっと出かけてくるよ」

「解つた、気をつけてなー」

鱗が入つている方の腕をふんぶんと振つて、彼は僕を見送つてくれた。

「ふむ……おまえが、か。師弟揃つて聖杯戦争に関わるとは

胡散臭そうな神父は、以前見た時と変わりなかつた。三年ぶりに会つたというのに、彼は眉ひとつ動かさず僕の復活を受け入れていた。僕にはそれが少し意外だつた。

彼にそれを聞くと、「人が一人生き返るくらい、大した奇跡では

ない」と言われてしまつたが。

僕は死んでない。

「それで、マスターとしてお前は参加するといつのかね。そこのマーダーとやらと一緒に」

「勿論だよ。けど、……驚いたな、靈体が見えるのか」

「そんなはずがあるまい。英靈ともなるとその存在は神祕のそれと匹敵する。私の所属を忘れたか、それに気づくはずがあるまい。それに、どのよくな道理で怨敵の本拠地に丸腰で入るつと考へる。それこそ愚の骨頂だろ?」

「確かにそうだ」

薄笑いを浮かべた吉峰は、僕の隣に立つ蒼崎橙子を見る。その瞳は生者のそれを感じられない、まるで死人のような瞳だった。彼の薄気味悪さは、今も昔も変わらないようだ。

「……何か私に用か」

「いや、魔法使いの姉 封印指定の人形師が、教会に顔を出すとは、と思ってね。驚いた」

「ふん、『協会』でないなら私の居場所はどこにでもある。勿論、長居はできないがね」

「成る程。それで、虚月識、私に一つ要件があるといつたな。一つ目は何だ」

「ああ、僕を鍛えて欲しい」

「……ほう?」

怪訝な瞳で、興味深そうな表情で彼は僕を凝視する。まけじとじちらも凝視する。

「三年のブランクは大きいんだ。あなたの八極拳を伝授してもらいたい」

「……聖杯戦争の開始直前にそんなことを言いく出するとはな、……」

初めて、言峰綺礼の笑みを見た気がする。悪魔のよつなその表情を、僕は忘れないだろう。

「宿敵の弟子になると願つか、面白い。明日から毎日ここへ来い。学校帰りでいいぞ」

そう言つと彼は背を向けて、祭壇の奥へと消えていった。僕はその瞬間に足で陣を描き、踵から魔力を流し込む。床下からめりめりといつ音が響き、甲高い声で鳴いて、それはどこかへと消え去った。

「……今のは、使い魔か」

「ええ、練成しました。彼が一体何をするか、予想できませんからね」

僕はそう言つと、教会を出た。

蒼崎橙子と虚月識の去った教会で、言峰綺礼は黒鍵を地面に突き立てた。ギャッ、といつ声と共に、“何か”が貫かれた。彼はそれがなにか確かめようとせずに黒鍵を引き抜くと、小さく溜息をついた。

「師匠を出し抜こうとは考へないほつがいいぞ、虚月識」

そういうと彼は、少年たちの呻き声の響く、教会の深部へと足を向けた。

聖杯戦争の開始は近い。

直死の魔眼／？ chapter two(後書き)

短いながらも戦闘しーん

うん、書き溜め限界ギリギリまで放出したら……いけるの、か、な  
?

それから数日間は何もなかつた。いつもどおりの日常が繰り返され、聖杯戦争の字も出なかつた。

だからこそ、気を抜いていたのかも知れない。

聖杯戦争の開始は、あまりにも唐突に、あまりにも迅速に訪れたのだから。

+

言峰綺礼に弟子入りして数日が過ぎた。放課後の学校というのは案外人気がなく、なるほど、肝試しには持つて来いだなと僕は思つていた。

柳洞の手伝いを終えた僕は、一人で学校をうろついていた。正確には、士郎を待つていた。本当は辻斬りめいた強盗殺人や、新都で起きているガス漏れ事件について調べに行きたかったのだが、士郎達と同居している手前、下手な行動はできない。マーダーとの会話も就寝前に一度や二度する程度だ。

聖杯戦争のない生活を謳歌するのもなかなか楽しかつた。腕抜けと思われるかも知れないが、三年ぶりの日常というのはいつまでも

楽しみたいものなのだ。

なにせ あんな、無を視せつけられていたのだから。

開いていた窓から、ヒュウと冷気が吹く。その冷たさは、あの空間に似ていた。

その風に乗つて、鋼が弾かれる音が聞こえた。

「……金属音？」

士郎くんが金属類をハンマーで叩いているのだろうか、だとしてもこんなに大きな音が鳴るはずがない。僕は吸い込まれるように窓に引き寄せられ、身を乗り出して、音のした方角を見た。

視力を強化せずとも解る。

そこには 赤と青の閃光が、火花を散らしていた。

（ サーヴァント！）

マスターの能力で、彼らのステータスを見る。片方は弓兵<sup>アーチャー</sup>、もう片方は槍兵<sup>ランサー</sup>。どちらも三騎士の一角とだけあって、かなり高レベルである。僕はマーダーに呼びかけた。

（今すぐ学校へ来てくれ、急いで！）

だが、返答は予想を裏切つたものだった。

（いや、悪いな主人。 厄介なのに見つかってしまった）

彼と感覚を共有する。頭の中に映し出されたのは、真っ黒なローブを羽織つた、月のよつた銀髪の男性とも女性ともとれる人の形をした「ナニカ」。

紛れも無く、サーヴァントだ。

『キャスターのサーヴァント、舞月外樹。手合わせ願おう、殺人貴よ』

（そうこうことだ、主。命令を）

小さく舌打ちする。一箇所同時にサーヴァント同士の戦いが起きているという、運の悪い事態に。

アーチャーのマスターも、ランサーのマスターも、周囲への被害は考へるはずがない。彼らは徹底的に潰し合つはずだ。それならば、運悪く士郎が遭遇したら最悪のパターンだ。かといって、こちらが下手に見を晒したら愚の骨頂である。

（キャスターの力を測つて、頃合こと思つたら離脱しひ、いいな）

（はいよ、生きて帰る）

感覚が遮断される。視界が元に戻る。

だがそこには、一つのサーヴァントの影はなかつた。先ほどまで戦つていた痕跡 グラウンドのあちこちが大きな爪で抉られたかのようになつてゐる があるため、あれが白日夢でないことは分かつた。ならば……

(戦闘が終わつた?)

おかしい、そんなはずはない。短時間でサーヴァント同士の決着がつくというのは異例である。先ほどの剣戟を見ても、何故か近接戦闘で『兵』と槍兵が互角の戦いをしていた。それならば、もつと長引いてもおかしくはないのである。

だから僕は、最悪の事態を想定するほかなかつた。

(土郎がアレに遭遇した !)

僕は急いで階段に向かつ。一刻も早く土郎を探さねばならない。このような形で彼が死ぬことはあつてはならないことだと、僕は必死になつた。

けれど、すぐ近くでサーヴァントの気配がした。

「 が悪かつたな、 」

下から、声が聞こえた。恐らく窓が開いていたのだろう。僕はその幸運に感謝しながら、魔眼殺しの眼鏡をはずすと、廊下の『点』を見つめる。そして、式さんのナイフを抜き

だが、聞こえた。

人体が貫かれる生々しい音が。

「あ、あ  
」

まだこの目で確かめていないのに、僕は確信した。この瞬間に、衛宮士郎は死んだ、と。三年とはいえ、体感時間では永遠に等しいような時間も死に向き合っていたんだ。他人より何倍も、死には敏感だ。

彼が死んだ。

日常の象徴とも言える、義弟が。

僕は深呼吸し、思考を整える。士郎が死んでしまったならば、まずはサーヴァントの動向に注意しつつ、彼の『回収』をしなければならない。僕は気配を消して、下の階に行つた。

マーダーは困惑していた。舞月外樹と名乗ったサーヴァントは、あらうことか腰から短刀を抜き、それで戦いだしたのだから。比較的障害物の多い屋内で戦っているため敵を翻弄しつつ様子見ができるが、開けた土地ならば五分五分、いや、こちらが殺す氣でかかるなければ勝てはしないだろう。

本来の彼の戦い方は暗殺だ。敵に気づかれるまでもなく、死を与える。

それがどうだ、こちらが気配すら感じ取れず“魔術師”は現れ、あらうことかこちらの土俵で戦つて己の手の内を見せていないのだ。舐められているにもほどがある。そして、路地裏というフィールドでなければ敵の器量すら測れないと認めている自分に彼は苛立ちを隠せない。

「先程から防戦一方だな、……見たところアサシンか、それともイレギュラークラスか。教えてはくれんのかね」

「わざわざ自分の手の内をあかす奴はないよ」

「じもつとも。特にこの戦争は情報が勝敗を決める」

言いつつ、キャスターは手を休めない。せわしなく動きまわる七夜が近づく瞬間に斬りかかる。その一瞬の隙を彼はいつも見逃さない。そこらの英靈が戦ってきた数の何百倍も、彼は戦場で生きてきたのだから。経験なら、どんな英靈にも負けはしない。彼はそういう

う確信を持っていた。

（本来の私の力ならば、こんなものは戦闘にすらならないのだがな）

運が悪かった、と彼は思った。魔力消費の大きさでマスターは生き絶え、途方に暮れてうろついていたら暗殺者の男と出会い、再契約。町の人間から採取できる極微量の魔力をかき集めて、また靈脈から魔力を汲み上げて何とか顕界している。つまり、魔力を使用する類のものは“今は”使えない。

（問題は中盤だ。序盤は敵の能力を図り、土台を固める。それさえ出来れば何とかなるが、恐らくどこぞのマスターが嗅ぎつけるだろう。そうなれば後は靈脈に頼るしか無い。……効率のいい汲み上げシステムでも考えるべきだらうか）

「考え方か？ 気を抜いたら死ぬぜ、お嬢さん」

「残念だつたな、私は男だ。女にもなれるがな」

「……？ 訳のわからない」とを言つた

お互い、渾身の一撃をぶつけ合う。彼らの武器はどちらも折れることがなく、使いての技量によって巨大なエネルギーを受け流した。

「閃鞘・八点衝」

「 ッ！」

地面に両足をつけた瞬間、マーダーは動いた。彼の手が閃き、一瞬にして八つの斬撃が繰り出される。かろうじで、キャスターはそ

れらをいなした。回避するには早過ぎる速度だつたからだ。

自分の攻撃をすべて防御されたマーダーは焦つた。コレに対処した人間は今までいなかつたからだ。しかし彼はすぐに考えを改める。敵は人間ではなくサーヴァント、今までの要領で行つたら勝てるものも勝てないだろう。彼は覚悟を決めて、直死の魔眼を“啓いた”。彼の瞳が蒼く煌き、視界に「死」を写す。

キャスターの死の線と点は無いに等しかつた。彼にとつてそれだけ死の線が少ないモノは初めてだつた。

だが、ないわけではない。

( 絶ち切る! )

八点衝の一倍。十六の斬撃が連續で繰り出される。しかしキャスターはそれを全て弾き 否、彼のローブの先が切れた。だがそれだけ。彼本人にダメージはない。それに、マーダーは舌打ちする。焦るなよ、とキャスターは微笑混じりに言つた。

「 ッ! 」

その一言がマーダーに火をつけた。本来暗殺者は常に冷静でなければならぬが、彼は生憎激情家だつた。使つていなかつた肉体を使い、キャスターを攻める。

まずは首筋に流れる死の線を狙つた一線。それを読んでいたかのように彼はそれを弾く。そこに空いた胴体に左の拳を叩きこむ。キ

ヤスターはそれを左の腕で防ぎ、そこから稻妻のよつに突きを繰り出す。自分の死の「点」を狙つた一撃に、マーダーは体を捻り、勢いづいて前進するキャスターとすれ違つて前方に飛び、距離を取る。

「ぜあつー！」

閃鞘・七夜。

マーダーは十メートル弱を、たつた一足で詰める。端から見れば一瞬姿が消え、キャスターの真後ろに現れたよつにしか見えない。サーヴァントとは言え、並を用意に越した速度で彼は動いた。そして、その加速エネルギーを乗せた一撃を、無防備な背中に叩きこむ。

だが、キャスターは真後ろに田があるかのように、前屈みになつてそれを避けた。

「なつ……ー？」

マーダーもこれには驚きを隠せない。その一瞬の隙を見抜いていたように、キャスターはそのまま左手を地面につき、体のバネをもつて、マーダーの腹部を蹴り飛ばした。

その華奢な足からは信じられないほどの力で、マーダーは吹き飛ばされる。彼は吹き飛ばされる際に、腰に刺さつていたナイフを投擲した。そして、勢い良く近場の壁にたたきつけられる。

「成程、特殊スキル……かな？　私の世界では死神之眼シニガミと呼んでい

たが、その下位互換のようだ

「私の世界？ シニガミ？ ……何を言つてゐる」

「おや、気が付かなかつたのか。君の知る世界には、『舞月外樹』といつ英雄は存在していたのか”？『殺人貴』

「 ツ」

（まさか、オレの正体に気づいている？）

馬鹿な、とマーダーは思つ。この戦闘の中で、彼の真名に気づく要素はひとつもない。生前知り合つた人物か、協会の人間でないと自分を知るはずがない。

それに彼の知る限り協会の人間に舞月外樹という名前の人間はないし、おそらく教会にもいないだろう。

そして 舞月外樹なんていつ名前の英雄が出る伝説なんて、聞いたことがない。

もしもいたとしても、自分の顔は未來でもそこまで有名ではないはずである。ならば何故、この男は自分の存在に気づいているのだろうか。

「そうだ。私は伝説で語られるような存在ではない。まして、一個人として大きな働きをしたわけでもない。私はただ、関わつた戦争のすべてを、圧倒的な力で解決してきただけにすぎない。だから、私は舞月外樹なんて名前で呼ばれない」

77

「 訳がわからない 」

訳がわからなかつた。何故、敵である自分に己の情報を明かすのか。マーダーにはそれが理解できなかつた。だからこそ、彼の言葉に耳をかたむけることが無駄であるとすぐに判断した。彼は四肢を地につき、獣のような格好で全身に力を込める。コンクリートの床に喰い込むほどの力を込めて　それは、爆ぜた。

「力を、見せろッ！」

屋根のある、四方を壁で囲まれた空間。上下左右に彼は飛び、キャスターとのすれ違い様に斬りつける。その速度は、並のサーヴァントでも目視しうる限界を優に越している。しかしキャスターは、あらうことか目を瞑つた。

（こいつ、気でも狂つたか）

何か狙いがあるのかとマーダーは疑つた。しかし、これほど大きく見せてくれている隙というのもない。彼はキャスターの心臓付近に小さく存在する点を突くために、ナイフを突き出し、迫る。

そして、キャスターは、目を閉じたままその攻撃を躱した。そして、あるうことか彼の目前に出た瞬間に、その肋骨に膝を叩き込んだ。まさかカウンターを叩きこまれると思わなかつたマーダーは、大きく咳き込んでからその事実を認識した。そして、自分の体が浮いたと感じた瞬間に、キャスターのナイフが己の心臓に、投擲する

よつに突き刺さつたことを、彼は確信した。

士郎は、確かに死んでいた。僕は彼の亡骸に歩み寄り、死体の状態を確認する。……まだ温かい、だが、急速にその体温は下がっている。少しだけど呼吸はある。けれど人工呼吸をしても無駄なほどに血は流れている。失血死は免れない。

苦しませながら殺すのが彼のためか、それとも、奇跡が起きて生き返るのを待つか。僕は選ばなければならなかつた。

「……召喚する前に、殺されるとはね

彼の右手の甲を見て、そつまく。そこには、マスターの証である  
聖痕セイゲンがあった。

昨日の時点で、彼にマスターとなる聖痕があるのは確認していた。彼は聖杯戦争を知らない風だったから召喚は偶然が起きないと仕方ないものの、聖杯に選ばれたのなら絶対に召喚をする運命にあつたはずだ。

（因果逆転の宝具でも使われた、か？）

一般人に対しても宝具を使うとは思えないが、それが付加されたものならば運命を歪ませることすら可能であろう。もしくは、“これらも運命の一つなのか”。

「……解らないな」

解らない。

ワカラナイ。

途端、疾風の如き速度で僕の隣を赤色の騎士が駆けていった。恐らく、士郎を殺した槍兵と戦っていた弓兵だろう。僕に一警をくれた気がするが、返すまもなく行ってしまった。

独り、僕が士郎の亡骸と残される。

「

その時、誰も居ないはずの廊下で革靴の音がした。

「

僕は振り向き様に、制服の袖口からナイフを抜き、いつでも音源に向かって疾走できるように身構える。

うそ、と言わんばかりに田を見開いて士郎を見る、誰かがいた。

僕は、“それ”的の顔を視認する前に飛び出した。相手がマスターならば、こちらの顔を見られる訳にはいかない。

最初に見えたのは、この学校の上履きと、黒いニーソックス。

それを見た瞬間に、まさか生徒がマスターだったとは、と思った。けれど、敵であることは変わりない。殺す相手である」とには変わりない。僕は歩みを止めず、もう一足踏み込む。

次に見えたのは、二つ結びにされた黒髪。そして、見覚えのある顔。

その瞬間に、踵でブレークをかける。僕の知りうる限り、知り合いにただ一人、こんな顔の女の子はいる。僕のお見舞いに毎日来てくれていた、学校のマドンナとも言える存在。

けれど、勢いは止まらない。幼い頃から鍛えられてきた反射で、腕が勝手に動く。

驚きで目を見開いている少女　遠坂凜が、そこにいた。

彼女の頸動脈を断ち切るために、僕の腕が、迫る。

「ぐ……つー」

壁に叩きつけられたマーダーは、自分に何が起きたのかを理解するのに数秒かかった。

今自分は、カウンターとして膝蹴りを食らった。サーヴァントの耐久力のおかげか、肋骨に大きなダメージは与えられたもののまだまだ戦える。問題は、心臓死の点付近に突き刺さった刃だ。下手に抜けば、「点」に傷をつけてしまつし、このまま戦うのも不利になるだけだ。

マーダーはしばし考えた後に、短刀の点を穿つた。それは柄からボロボロと崩れ落ち、突き刺さっていた刃は瞬く間に錆び付いた。

いける、か？

マーダーはキャスターを見る。余裕の表情で、彼はマーダーを待つていた。どこから取り出したか、パイプをふかしている。傷口の治癒を待っていたマーダーは、じつと彼を睨みつけていた。そして、敵から得られた情報を確認する。

相手は、キャスターなのに近接戦闘も大の得意。手合わせした限り、俊敏さとパワーは化物じみている。短刀を破壊されても余裕で、パイプをふかすだけの自信を持っている。

マーダーは腹立たしかった。この男は一体何者なのだ、と苛立ちを隠せずに舌打ちした。

それが聞こえたのだろうか、鼻歌でどこかの国の軍歌を歌つていたキャスターがマーダーに目を向けた。マーダーを見た瞬間、キャスターの眼の色が変わった。それは焦りではなく、感嘆の瞳だった。キャスターは拍手した。そして、パイプを口から外し、ふう、と息を吐いた。

「術式開放。煙よ 潰せ」

彼の口から吐かれた煙が、形を取る。内側から膨張するように、それは曲面を形作る。みるみるうちに二メートルほどの“巨体”になつたそれの瞼が開かれた。眠たげに頭をガシガシとかくそれは、キャスターを見ると怒鳴る。

「人様の安眠を妨害すんじゃねえよ、外樹イ！」

「貴様は私に敗けた時点で従僕だ。主人の命令を聞けないのか、下僕」

「ンだよ、畜生……で、敵は つと…」

「煙」は、慌ててその場から離れた。煙らしく霧散するかと思つていたマーダーは残念そうに「煙」を見る。それは初め氣怠げにしていたが、マーダーを見た瞬間にその表情を一変させた。そこに見られるのは、驚きと、恐怖。

「おいおい聞いてないぞ外樹！　『死神之眼』<sup>シニガミ</sup>持ちだなんて敵うはずがないだろうが！」

「死ぬなら死ね。今のお前は私の付属品でしか無いんだ、何度も復活可能だ」

「それでも痛いだろうが よつー！」

「煙」はマーダーに向けて両腕を突き出す。その両腕が形を変え、無数の弾丸となつてマーダーに飛来した。その数は数えきれず、一つ一つがミサイルポッドのように更に小さな弾丸となつた。マーダーは体を低く屈めて、駆ける。直線的に動くだけと思っていたそれを躱したと思ったマーダーは、投げナイフをキャスターに投擲する。

キャスターはそれを物ともせず、それを「掴んだ」。そして、

「返すぞ」

捨てるように、無造作に投げた。その速度は弾丸よりも疾く、運悪くマーダーを追つっていた弾丸の殆どを薙ぎ払つた。煙の弾丸がその衝撃波で地面にたたきつけられ、クレーターのような傷跡を作る。マーダーは自分を追尾する弾丸を躱しながら、敵の隙を狙つていた。

「つてえな、少しは配慮しやがれ！」

「黙れグズ、手傷ひとつ負わせていないくせに喚くな

マーダーは地面に突き刺さつた投げナイフを拾うと、弾丸の網の間を通すようにして今一度投擲する。「煙」との会話に気を取られていたキャスターは、それを掴むことはせず、咄嗟にパイプで弾いた。

そのパイプが、切れる。運悪く、ナイフはパイプの「点」を突いていた。ぼろぼろと手の中で風化していくそれを、キヤスターは握りつぶす。彼はわかつてた。今の一撃は自分のこめかみ付近にある点を狙つた一撃だと。彼はマーダーの技量に感服した。そして、蒼く煌めくその瞳を見る。

視線が合つ。マーダーは劣勢とも言える状況で、不敵に笑つてみせた。

ぞくり、と寒気がした。

「マスターとして命令する。下僕よ、死力を尽くして敵を殺せ」

マスターの心情を知らず、煙はぼやく。

「辛辣だねえ……」

彼はマーダーの恐ろしさに気がついていなかつた。バカめ、とキヤスターは呟く。

「術式展開、対象は弾丸、その全てを三倍速に！」

青白い魔方陣が展開される。そして、そこから無数の触手が伸び、弾丸の一つに触れた。するとそれが青白く輝き、“三倍速で”動き始める。それは次々と伝播し、そのすべてが三倍の速度で動いた。それを操つていた「煙」は驚きつつも、普段は一切手を出さないマスターの援護に感謝する。

弾丸を数個のグループに分ける。自分の退路を塞ぐよつとして迫る無数の弾丸を、マーダーは上下左右に動くことで回避する。だが、

そう簡単に回避させてくれるはずがない。

(挟まれた !)

上下左右、全方向から攻撃が迫る。マーダーは田に馬鹿らしい速度で駆けていたが、今度ばかりは厳しかった。

(こちらの手は読まれている、が、下手に警戒させてはこちらの想う通りにいかない)

ここで動くか否かが、次の一手を決めるヒマーダーは確信した。彼は右手と両足の踵で地面を削りながらブレーキをかけた。アスファルトが抉れる様は、彼の運動エネルギーの大きさを表していた。

わざわざ足を止めて、一体何をしでかすつもりだうと「煙」は訝しがる。先程から敵は自分を眼中におかず、ただ一点 外樹をどう殺すかと考えている。自分はその障害にすら扱われていない。

「煙」は自分の扱いが不満だったが、しかし、マスターからの命令は達成する。だからこそ彼は、敵を確実に仕留められると確信した今油断しきっていた。

だから、マーダーが自分に目を向けたときに困惑した。

その表情は、愉悦に染まっていた。

「 爆ぜろッ !!

「煙」は、それに絶対的な恐怖を感じた。殺されるという確信を得た。一刻もはやく仕留めねばならない。コンマ一秒でも速く、こ

の男の行動を阻止せねばならない。煙はその一心でその行動をとつた。

マーダーに迫っていた弾丸が一斉に爆発する。

爆発の中から、一本のナイフが飛び出した。

吸い込まれるように、それは「煙」の「点」に突き刺さる。そして、その瞬間に煙は命を刈り取られた。

そして、その中から、人影が飛び出る。それがキャスターに迫り、彼が虚空から取り出した真っ黒な刀と鍔迫り合いになった瞬間に、爆発は発生した。その衝撃波は巨大で、そこに巨大な穴を作った。辺りに撒き散らされたそれはソニックウェーブと化し、手近な建物に鋭利な傷跡をのこす。勿論それはキャスターたちにも迫るが、彼らの鍔迫り合いが引き分けになり、お互の刃が反れた瞬間のエネルギーで全て吹き飛ばされる。

マーダーが地面に足をつける。その瞬間に、無数の金属音が辺りに響いた。

目視することすらままならない斬撃の産み出すエネルギーは大きい。先ほどのソニックウェーブすら物ともしない速度で、彼らは刃を交える。

そして、お互いが大ぶりの一撃をぶつけ合つ。

爆発のような金属音が、巨大なエネルギーと共に撒き散らされる。彼らの周辺の地面には、同心円状の鱗がはいつていた。

ぎりぎりと、刃が不快な音を立てる。だが、彼らにとつて、その

音は戦いの音頭にしかなつていない。

蒼い瞳と、黒い瞳の男。彼らは眼前に迫つた敵に対して、賞賛の言葉をかけた。

「オレの刃をこれだけ止めたのは、お前が初めてだ」

「俺に殺されなかつたのは、お前が初めてだ」

彼らは、笑いあつ。

だが、マーダーはキャスターを蹴り飛ばすと、十メートルほど距離を取つた。

「悪いな、幕が降ろされ始めた。今日の舞台はこれまでのようだ」

再演の時に、また会おう

そういうと、マーダーは姿を消した。その場所が明るくなり始めたので彼は空を見上げた。

「朝、か」

彼は笑いながら、暖かい光を見に受けっていた。そして、今日出合つた敵にまた会える時は、近いと確信した。

## 直死の魔眼／？ chapter six（後書き）

えつと、とりあえずオリサヴァの設定公開。こいつが今回の聖杯戦争の鍵を握る……かもしれない、「ギルガメッシュ」とタメ張れるチート」です。

【クラス】 キャスター

【真名】 舞月外樹

【マスター】 不明

【性別】 男性

【身長・体重】 200cm（程度）・不明

【属性】 中立・中庸

【武装】 短刀 など

【筋力】 A 【魔力】 EX

【耐久】 B 【幸運】 E

【敏捷】 A++ 【宝具】 ??

### 【クラス別能力】

・陣地作成 EX

魔術師として、自分に有利な陣地を形成できる。この域になると工房を上回る神殿を作成可能。また、範囲も巨大化する。

・道具作成 EX

魔力を帶びた器具を作成できる。この域になると”本物”の不死の薬さえ作れる。もはや人外の域。

### 【保有スキル】

・神性 EX

神そのものと言える存在。しかし神ではない。そのため、神性の高い敵に有効な効果を發揮する武器の影響を受けない。

・魔術 EX

この世界の法則では説明できない魔術を使う。魔法の域に達している。

・単独行動 A+

聖杯戦争終了後も独力で限界するだけの存在。規格外。

・宗和の心得 A

同じ相手に何度も同じ技を使っても命中精度が下がらない特殊技能。

・心眼 (真) EX

修行や鍛錬で得た洞察力と戦闘論理。窮地でも、逆転の一手を冷静に遂行可能。人が一生をかけて関わる戦争の数をはるかに超えた数の戦争を駆け抜けた末に、第六感による危険予知などよりも優れたものになっている。精神干渉・視覚妨害をほぼ無効化する。

・戦闘続行 A

心臓を抉られるか、首を落とされるかしない限り、どんな傷を受けても生き延びれる。この域になると呪いの一種ともどれる。

【宝具】

不明

このキャラクターは「ぼくのかんがえたさいきょうつきやうくたー」です。他の作品にもちょくちょく出てます。この作品では実質「マ

スター不在」に近い状況にすることで、その能力の殆どを制限することにしていますが、それでも（魔力が十全にあれば）ギルガメッシュとタメ張れるレベル。正直チート。批判の嵐が飛んできそうだなあ、と思っていますが、物語の要にもなるので御了承ください。

あと、書き溜めが戻きました。書きためてきます

僕は寸でのところで刃を止めることが出来た。僕の正面　おそらく五センチほどしか距離がないだろう　に、遠坂凜がいた。僕は彼女から離れて、刃を逆手に持ち替える。見えるところにはないようだが、彼女がここにいるということはあの部屋のマスターであるには違いないだろう。

「虚月　先輩？」

「凜ちゃん、細かい話は後だ。士郎を助けることは出来るか、できないか？」

「え　つと、それは」

彼女はこの状況が飲み込めていなかった。それから少しして、遠坂凜は僕の向こうにいる士郎を指をして、おそるおそる僕に尋ねる。僕は彼女の表情から何を聞かんとしているかを察知した。

「死んでるよ、見ての通りさ」

「　」

彼女が息を呑む。びくびくと胸に空いた穴から血を流す彼を見て何を思ったのだろう。少しそれが気になつた。僕はナイフをくるくると回して、彼女の答えを促す。彼女はそれに気づいたのか、首からかけたペンドントをギュッと握りしめてこくりと頷いた。

「士郎を、助けてくれ」

僕は彼女をまっすぐ見てそう言った。彼女は深呼吸すると、その表情を一変させた。それは、しつかりとした、魔術師の目。「あの「忌々しい遠坂時臣を思い出させる目。僕は湧き上がる憎悪を、歯を食いしばって耐えた。だが、その瞳が彼女の母親の見せたような、「あまりにも人間的な」瞳を見たとたんに、僕の憎悪は泡のように消えた。

「 できるだけは、やります」

そう言つと、彼女は僕の横を通り、士郎の横に立つ。彼女は彼の状態を改めて見て、いるようだつた。彼女はペンドントを外して、何やら高度な術式で、彼を生き返らそうとしていた。僕はそれをじつと見る。

何かを、思い出した。

フラッシュバック。視界を塗りつぶすように映像が投影されて、映像が流れこむ。見えるのは遠坂凜と僕、そして胸に穴を開け、虚ろな目をした「 」。

そう、それは遠坂凜が誤つて殺したのだ。

僕の「 」を、誤つて、魔術で、殺したのだ。

そして、遠坂凜が撃たれる。それを庇つて、僕の体に穴がぽつか

りと開く。

「これは、なんだ？」

解らない。

わからない。

ワカラナイ。

吐き気。頭痛。点滅。

血の気が引いていく。体中が冷たくなる。息が荒くなり、手にあるナイフが震え始める。

気持ち悪い。

先ほどの記憶にあつた穴の場所が痛み始める。

きもちわるい。

「……輩、 丈夫、……か？」

声が、聞こえる。女の子の柔らかい声が、どこからか、この気持ちの悪さの外から、響いてくる。

「先輩？ 先……？ し……、ねえ、大……なの？ し……、  
き、識！」

我に返った。僕の頬には遠坂凜の白く、温かい手が添えられていた。見れば、宝石のような瞳は不安気に揺れていて、その端に涙が浮かんでいた。僕はまるで何度もそうしたかのように、自然と「大丈夫だよ、凜」と言つて、彼女の手に自分の手を重ね、笑顔を浮かべた。

「よかつた……あ、でも氣分が悪いなら無理はしないでね」

「ああ、氣をつけるよ」

……」ここまで話して、僕は何か引っかかりを感じた。

僕は彼女と、仲が良かつたかのか？ 僕は遠坂凜を「凜」と呼び、遠坂凜は僕を「識」と呼ぶ。僕と彼女は、そんな間柄だったのか？

なにかを、忘れている。

「あ……す、すいません！」

「いや、……話して、くれないか

僕と君が、どういう関係だったのかを。

彼女は、下唇をかんで、僕から目を逸らす。

「僕は、何かを忘れている。この数年間で“なにか”を

知り

たいんだ、それを

「知らないほうが……いいことも、あります」

苦虫を噛み潰したような顔で、彼女は、そういった。僕は手に持つナイフに目を落とした。白銀に光る刃は、彼女の足元を写している。床が見えないほど暗く、彼女の足に纏わり付くよご、影は広がっていた。

影が、広がっていた？

「 ッ！」

僕は凛を、いわゆるお姫様抱つこの体勢で彼女を持ち上げると、士郎くんの体のある方向へ跳んだ。

瞬間、青白い軌跡が三つ、僕達のいた空間を切り裂いた。

とても美しい三本の線。僕が動きさえしなければ、確実に、僕と凛の首を落としていたであろう、僕が前方に飛びさえしなければ。僕は凛を下ろすと、「影」と向き直る。

影の中から、何かが煌めいた。

「ゴーストのサーヴァント、佐々木小次郎。 名を名乗れ、少年」

影から浮かび上がったのは、真っ黒な羽織を着た、紫髪の侍だつ

た。右手に持つ業物は二メートル弱あり、平均的な日本刀よりもとても長い。辺りは暗い影に包まれているというのに、その白刃は薄い煌きを保っている。うつとりするようなその刃が動き、僕に突き付けられた。

「名乗れ。……私の“燕返し”を読んだのは、君一人だ。この技を避けた。その名誉を誉めとするのが武士だろう」

「生憎、僕は武士ではなく暗殺者だがね。名前は、虚月。虚月 識だ！」

「虚田 その奴、覚えておる?」

「光栄に思うよ」

ゴースト 佐々木小次郎は刀を下ろすと、左手に握つた真つ黒な刃を振るう。まるで影で作られたかのような、鋭利な何か。周りの闇よりも一層暗いそれは、空間から浮き出ているようにも見えた。このサー・ヴァントが二刀流の侍には到底思えないため、引っ掛けりを感じた。

「ゴーストが刃を降ろす。そして、しばし睨み合ひ。

「僕は靈体と戦つつもりは毛頭ない。やがなう、呼ばせてもりおつ  
か」

「呼ばせぬ間も、『ええ』

僕は凛に目配せして、自分のサーヴァントを呼ぶようにいつ。この段階で令呪を使う訳にはいかない。絶対命令権は最後までとつて

おいたほうが得策だ。彼女のサーヴァントが来るまで、足止めするのが最善の策だろう。

幸い、このゴーストというサーヴァントのステータスはそれほど高くない。死を覚悟して戦えば、相手が万全ではなかつたとはいえ、バーサーカーとやりあつこともできる。一分あれば、十分なのだ。できないはずが、ない。

足に力を込める。ナイフを逆手に構え、疾走の構えに入る。

一瞬の静寂。影が揺れる。白刃が煌き、

弾けた。空間そのものが碎け散るような爆音が響き渡つた。力負けした僕は反対側の壁に吹き飛ばされる。背中から貫くような衝撃が走り、肺から空氣が吐き出される。僕は一時呼吸困難に陥り、咳き込む。腕に力は入らず、ただの一撃で三撃加えられたような衝撃があつた。

違和感。一度刃を交える間に三度も斬ることなど不可能だ。見れば、眼鏡越しに黒装束の侍がこちらに刃を見せているのが見える。

あの、黒い刀が三つにわかれていた。まるで生きているかのように蠢くそれは、妖刀という言葉をまつさきに連想させた。

「まさか、我が主人に『えられた刀がこのよつた使い方を出さるとは思いもしなんだ。……まあ良い。その中でも一撃加えたその腕、末恐ろしいな」

「妖刀、か？」

「私のものではないがな。……ふふ、邪法に手を染めるつもりは毛頭ないが、この刀を使えと命令されては仕方あるまいな。不服だが、コレで戦わせてもらおうか」

無理だ。このままならば一分も保てない。恐らくアレがあれば僕が攻撃している間に凜と蘇生した士郎を殺すのは可能だろう。

直死の魔眼を、使うしかない。

眼鏡に手をかける。少しづれた部分からは、既に赤黒く光る、「線」が視えている。そして、その起点となっている「点」も。コレを監視しているマスター及びサーヴァントがいないとは限らないため、カードを開かすのは得策ではない。

（やるしか、ないか）

僕は決意を固めた。だが、僕が眼鏡をはずす前に敵が動いた。つ、と僕の上に視線を向ける。そこには綺麗に浮かぶ月があった。何かを見つけたかのように、彼はそれを見たまま動きを止めた。

普段ならば、ここで飛びかかっていただろう。だが、侍しかも明鏡止水の領域に到達した達人ならば、後の先がどれほど強いかよくわかっている。自分が刀を持っていない今、向かっていくのは愚の骨頂だ。

機を伺う。

しかし、『ゴーストは不服そうな顔をして僕を見ると』、「えひや、  
時間切れのようだ」と呟いた。

「又会おうや、暗殺者」

もうじて、ゴーストは姿を消した。亡靈の名の通り、音も立てず

110

あけましておめでとうございます。

なんかラストが微妙ですね。

取り敢えず年明け一発目の投稿。随分遅れましたが一週間～一週間後辺りから一日～三日おきの投稿を行おうと思います。

前回のステータス公開でいろいろな牽躊を買つたと思しますが、言葉足らずだったようで誤解を生んだこと、誠に申し訳ございません。

改めて書きますが、あくまでも「最善の状態のステータス」であつて、現時点でのステータスではありません。また、マスター不在であつてもステータスはあまり変わらないといつ指摘を受けましたが、そのようなものも全て考えた上で創り上げています。起承転結の起の序盤～中盤です。終盤にすら差し掛かっていませんので、多少の違和感は伏線としてみてくださいとありがたいです。

誤字脱字は極力内容にしていますが、見つけた方がいましたらご指摘のほど、お願ひします。結構傲慢な考え方かもしれませんのが、よろしくお願ひします。

感想お待ちしております。

#### 追記

「お正月特番」みたいな番外編みたいなのを書いて欲しい、といった希望がありましたら、感想欄またはメッセージにお願いします。

【お正月特番】 「「都合主義の世界」にみんな、集まれー！」（前書き）

お正月特番です。

タイトルからふざけておりますが、この特番は「都合主義の世界」で行われている物語です。本編に一切の影響を及ぼさず、ここでの設定は「ご都合主義」の一言で解決してしまうものです。矛盾点なんてあつてもしつたこいつちやねえや！ なテンションで行なつています。」「都合主義キラーな方も、」「都合主義どんとこい！ な方も、楽しんでいただけたと幸いです。

【お正月特番】 「1月都合主義の世界」 にみんな、集まれー！

「お正月だね」

識が言つた。

「お正月ね」

凛が言つた。

「お正月だ」

士郎が言つた。

「お正月ですね」

桜が言つた。

そして

「正月じゃあああああああー！」

舞月が言つた。

識 「……あれ、ねえ、なんでいるの君。 いい僕の家だよね」

舞「いやあ、いいじゃないか。宙に浮いてるだけだし」

凜「どうこうことなの……」

士「ところより、誰この人」

桜「無名のモノ書きですよ、あつと」

識「一生名前を知られない呪いをかけてやる」

俺「勘弁してください。あああお前たち、初詣に行きなよ」

識「お前同伴で?」

凜「お断りね」

桜「同意します」

士郎「ま、まあまあいいじゃないか。……って、消えた」

失礼しました。気分を害した方は申し訳ありません。無名のモノ書きは語りに移りうつと思います。

一月一日。冬木市のお正月はそんな特別なものではなく、柳洞寺で鳴らされる鐘を聞きつつ年越しそばを食べ、そのまま三社参りに行く者と、友人の家に集まってのんびりする者、また恋人どうしで一夜を過ごすヒトもいれば……と多様な過ごし方がございます。

虚月識と遠坂凜、衛宮士郎と間桐桜は後者の過ごし方。恋人同士くつついて、イチャイチャしながら年を越したのでござります。リア充爆発する。

そんな一組は元旦のお昼になると、虚月の（馬鹿のよろこび）大きな屋敷に集まって、ささやかなパーティーを開くこともなく、こたつの中でのんびりとしていたのでござります。

「しつかし、何だつたんだそれきの」

と、識。そもそも小説の世界には私は存在しておりませんので、私の存在を知らないのも無理はございません。

「えつと……神様紛いと思えばいいんじゃないですか？」『物語』を書くしか能がない無能さんですけどね？」

ひどい事を言つてくれるな、間桐桜よ。本編でヒロイン枠から外してやる。

「外したら殺す」

「ごめんなさい。勘弁して下さー。といふか何で聞こえてるんだよ、小聖杯つてそんな万能だつたつけ……？」

「さ、桜？ 目が怖いぞ……？」

「あ、ごめんなさい。なんでもないの、士郎さん」

切り替えが早過ぎる桜。こわい子……！ どうでもいいけれど、ネットスラングで「恐ろしい子……！」と言つのがあるらしいですが、アレって元ネタなんですか。Fat eが元ネタならば、「こわい子……！」のはずなんですがね。

「でも、さつきの変な奴の言つてたとおり、初詣に行くつていうのもいいかもしれないわね」

おお、凛が俺を肯定してくれた。超嬉しい。それから彼らは数分ほど話し合い、柳洞寺に遊びに行くことを決定しました。一成くんからすればいい迷惑です。家ではメティアなんていう女と葛木はイチャイチャし、侍と魔術師チックな長髪の男は化物じみた組手を見せてあるのです。

ぐだらないことを話している間に一組は雪の降る冬木の街に繰り出しました。腕を組んでいちゃいちゃいちゃいちゃいちゃい。雑踏のカツブルも妬みの眼を向けるほどであります。識と凛に至つては一つのマフラーを一人で共有するといふ奥義を魅せつけるほど。隣にいる士郎と桜ですらラブラブオーラに圧されているほどであります。

「ねえ、明日はどこにいこうかしら？」

「一人ならどこでもいいよ。あ、でも静かな所がいいなあ

「同じこと考へてるわね。近くでないかしら、そういうの？」

「どうせなら温泉にでも行こうか」

「あり、識にしてはよく思いついたわね」

「お、何だその言い草」

「あ、ちょ、くすぐつた、あはははは！」

「こねくり合つう一人。ふたりだけの世界に入つているよつで、ジヤー、  
ます。士郎と桜は一人をおいてもう行つてしましました。」

所変わつて冬木の港。新都から少し離れたところにある釣りの名所では熾烈な戦いが繰り広げられておりました。

「フイイイイイッ シュ！」

「調子にのるなよ、フエイカ 賢作者！」

（あいつらが釣り過ぎて俺に一匹も来ねえ……）

ランサー落ち込む。アーチャー一人の釣りバカ日誌に生で遭遇するには冬木市の釣り人にとつてもつとも大きな不幸だ。黒いタンクトップ姿のアーチャーはメカメカしい竿を使っております。傍らには大型の水槽が一つ、二つ……全部で五つ置いてあります。そのなかには一杯に魚が入つております。リリースすることを祈るばかりですが、鷹の目を持つ彼の技術は金ピカのそれを上回ります。

しかし金ピカ技術はダメでも道具で釣ります。フルオートの釣竿なんていう宝具や、意味いれても底なしに入る四次 ポケットのような水槽もどき。反則技を使って釣つて何が楽しいのでしょうか。

「お、気が合うねえアンタ」

「あれ、見えてる？」

「あたほうよ。ンなどこりいないでお前も釣らねえか？ 結構楽し

いぜ」

「誘われてしまつた。……どうしようかな、語りも結構面倒臭いし

なあ……

「遠慮すんな、ほれ、竿。餌はオレの使つていいぞ」

「兄貴と呼ばせて下さい。

「おひ? ま、何でもいいぜ。動機は気になるが

「や、男氣あるじやないか

「コレくらいやらない奴がいるのか?」

「ほら、そこのアーチャー一人

「ああ……」

ランサー兄貴と共に弓兵一人を見ます。フィッシュユーフィッシュユと叫び続ける男と雑種雑種うるさい金ピカを見て、二人同時に溜息をつきました。

「のんびりするか……」

「そうだねー……」

お正月の過ごし方は人それぞれ。

寒空の下で釣りをするというのも、いいかもしません。

「こにいたのね、駄犬」

「…………」

兄貴冷や汗。俺脱走。

「我に触れぬ ノリ＝メ＝タンゲレ」

「ギヤアアアアッス!」

「ちょ、おま、ソイツ無関係……」

「言峰の関係者である以上逃すわけには……」

三十六計逃げるにしかず、ランサーの兄貴、こにはスケープ・ゴートとして使わせて貰いますぜ。

そう言いつつマグダラの聖骸布の対象をランサーに“書き換え”て、するりと抜けだす。カレン呆然兄貴啞然。語りは語りとしての

んびりする暇も「えられない」でござります。そのまま飛んで逃げ、あの一組の行方を探すことにしておいたのでござります。

「…………」

赤い弓兵がこちらを見ていたような気がしますが、氣のせいでしょう。

「あ、お地蔵さんだー。お正月もここなんですか？」

「いや、本来ならばどこにでも行けるのだが……女狐に門番を頼まれてな。薪でもしなければ寒くてかなわん」

今度は柳洞寺の門前。門番をしているお地蔵さんこと佐々木小次郎は、穂群原三人娘の一人、三枝由紀香と遭遇しておりました。どうやら三人娘と来たようですが、三枝一人残つたようです。

「あの、クリスマスには会えなかつたから、これ……」

もじもじしながら鞄の中から取り出したのは手編みのマフラー。彼とマッチするように作ったそれを見た小次郎は驚きつつ、感謝して受け取つた。

「あ、あとこれとこれと……」

鞄の中から出てくるのは手編みのセーターに（手作りではないと信じたい）Tシャツ。それに加えて何故かズボンまで出てきた。「えへへ……小次郎さんに似合つのを作つてたらこれだけできちやいました」

「そ、そつか……ありがとう」

どう対応すればいいのかわからず、顔を赤くして受け取るお地蔵。ここにもカッフルらしき一人がいた。

「あら、三枝さん」

そこに通りがかったのは遠坂凜と虚用識のラブラブカッフル。彼らの共有しているマフラーを羨ましそうに見る三枝。

「小次郎じゃないか」

「識、か。これはまた、なんというか……」

「はつはつは。大いに羨め、侍」

「……ほつ、やるか、暗殺者」

「ちょ、ちょっと、喧嘩なんてしないでください」

「そうよ識。やめなさい」

物凄い重圧をかける遠坂凜ことあかいあくま。暗殺者ですら震え上がる恐ろしさでござります。三枝はいつも遠坂凜とは程遠い言葉遣いに驚いたようですが、こちらが素だとすぐに気づいたようで、気にすることはないと判断してしまいました。

「ま、そういうことだから、また今度相手してくれよ

「いつでも相手にならう。今度こそ決着をつけようぞ」

不敵な笑みを交わして侍と暗殺者は別れ、遠坂組は山門をくぐり柳洞寺へ、三枝組は山門に残りました。

「ね、小次郎さん」

「何、だらうか、三枝殿」

「さつきの、やつてください」

「は?」

ほんわりとした笑顔のまま、一人で一つのマフラーをしようなんていうお願いを、彼女はしたようです。

その田のお地蔵さんは、二口二口笑顔の女の子と一田を過ぐすことになつたとか。

「衛宮……」

「よう、一成。調子はどうだ?」

神主姿の柳洞一成に、間桐桜と腕を組んで話しかける土郎。それだけの行為が独り身にとってどれだけのダメージを与えるか、彼は知らない。

「見せつけられても、もう慣れてしまつたな……」

「……？」

「いや、なんでもない」

溜息混じりに咳く一成に首を傾げる士郎。桜はそれをみてクスリと笑みを浮かべる。あの女狐そつくりだと一成は思いつつ、しつしとあつちに行けとジエスチヤーする。

「俺なんかに構わぬ、一人で参拝してこい」

「ああ、そうさせてもらうよ。じゃあまた」

「失礼しますね、柳洞先輩」

士郎に続き桜も挨拶をし、一人は行つてしまひました。

「しかし、二人は恋人同士だつたか……？ 確か『セイバー』なる

女子がいたはずだが……」

「なにを言つてるんだ、一成君。セイバーも桜も士郎に氣はあるけれど、まだ士郎は誰にもなびいてはいないぞ」

「識さんつ！？」

突如真後ろから声をかけられ、飛び上がる一成。そして彼の言つ

「女狐」とマフラーを共有する姿を見て絶句した。

「こんにちは、柳洞君。あけましておめでとう」

「あけましておめでとう、識さん。女狐と話をする舌は持ち合わせていない」

「おい、僕の彼女をなんて言つた？」

目に光が灯つてない、恐ろしい瞳で一成を睨む識。さすがのあかいあくまも気圧されております。慌てて取り繕つ一成。そして逃げ出す神主ジユニア。

「さ、行こうか

「え、ええ……」

時折見せる鬼神の如き表情だけはいつまでたつても慣れない遠坂凜であつた。

参拝客も少なくなつてきた頃ですので、列があるはずもなく、二人は階段の上の社にお参りに行く。そこには一礼一拍手一礼のマナ

ーをしつかり守つて願掛けをしている士郎と桜がいた。身長差が大きいため、兄弟のようにも見えるが、傍目から見ても彼らの関係は親密なものに見える。

だが、桜よりも仲が良いといえばセイバーがいたはずだ、と識は考える。そういえば今朝から彼女を見ていない。もしや自分たちよりも早く起きたのかと思うが、桜に聞いたら“つめたいひとみ”が向けられたので、言及ができない状況であつたといいざるを得ない。

「ねえ、今誰のこと考えた」

「えつ」

「別の女の子？ もしかして浮氣相手？」

「そんなんのいるわけ無いだろ？」

「ふうん」

後で証拠を見せるしか無いな、と苦笑する識。士郎達が終わつた所で自分たちもお賽銭を投げ込み、一礼一拍手一礼。しばし願掛けする一人。

三十秒後、彼らは目を開けて、おみくじを買いに階段を降りる。

「ねえ、何お願ひした？」

「凛が教えてあげる。約束しよう」

「じゃ、せーので一緒に言いましょう？」

「せーの」

二人一緒に幸せな一年になれますよ！」

隣で聞いていた士郎と桜は、この甘々カップルの所業に赤面させられた。桜は士郎に同じ事をしようと「士郎さんは何をお願いしました？」と尋ねたが「正義の味方になることさ」とすぐに明かされてしまい、目論見は失敗に終わった。

「あーあ、彼女欲しいなあ」

好き好き光線を出されても全く気づかない鈍感の一言であった。

【お正月特集】 「11月令主義の世界」 みんな、集まれーー（後書き）

文体もはつやりしない、へんてこな文章をつらひつらと連ねてこられたでございました。

楽しんでもらえたら幸いですと書いたへんてこ、あまり面白くなかつたと思います。申し訳ありません。

やせつロメイトは苦手です。

読んで下さりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6508y/>

Fate/stay with murder

2012年1月1日21時48分発行